資料

（平成二十九年十二月）

第六十二回「合宿教室」（福岡）感想文集

――日本人としての自覚をもとめて――

公益社団法人　国民文化研究会

第六十二回「合宿教室」（福岡）全参加者の感想文と短歌詠草

とき　平成二十九年八月十一日（金）から十三日（日）まで二泊三日間

ところ　福岡県福岡市「さわやかトレーニングセンター福岡」

参加総数　八十三名

目　次

〝はしがき〟に代へて……理事長　今林賢郁…2
大学別参加者数・その他の人数の内訳……5
「合宿教室」62年の歩み……6
「合宿教室」の日程表（二泊三日）……8
第62回「合宿教室」のあらまし……9
走り書きの〝感想文〟と第二回目の〝短歌詠草〟……21
合宿中に創作された「短歌詠草」……61
あとがき……74
カメラ・レポート19枚（23～59の奇数ページに掲載）

〝はしがき〟に代へて

公益社団法人　国民文化研究会　理事長
今林賢郁

昭和三十一年（一九五六）に鹿児島県の霧島神宮で第一回が開催された本会の「全国学生・青年合宿教室」は今年で六十二回を迎へ、平成二十九年八月十一日（金）～十三日（日）の日程で、福岡県福岡市「さわやかトレーニングセンター福岡」で開催致しました。例年になく厳しい暑さが続く中での開催でしたが、参加者全員が健康を害することなく最終日を迎へることが出来たのは有難いことでした。

我が国を取り巻く内外の状況はまことに厳しい局面を迎へてをり、安全保障面では戦後最大の危機に直面してゐると言っても過言ではありません。幾多の先人たちがいのちを賭けて護り続けてきた自国の独立を維持するために、われわれにはどのやうな生き方、心構へが必要とされるのか。そのためにも先づは自国の歴史をより深く学び、お互ひの心の中に本来の日本の姿を活き活きと蘇らせて欲しい。「日本の心に触れる」といふ今合宿のテーマはそのやうな思ひを込めたものでした。参加者には日頃の日常生活とは違っていささかの緊張感もあったとは思ひますが全員が心を傾けて取り組んだ二泊三日となりました。

今年の合宿では初めて招聘講師をお招きすることはなく、本会の会員諸兄がすべての講義を担当しましたが、それぞれのテーマについて心を込めて参加者に語りかけてくれました。以下、簡単に講義内容を記します。

『学問と人生―小林秀雄に学ぶ―』（飯島隆史氏・六四歳）は、講師が学生時代にはじめて参加した合宿の講師が小林秀雄であり、それ以来今日に至るまでの小林秀雄の読書体験を語りながら、真の学問とは心が震へるやうな感動を人生に与へるものでなければな

らないのではないかと問ひ掛けました。『国の目覚めと万葉集』(小柳左門氏・六九歳)では、七世紀の後半、朝鮮半島に起った白村江の戦ひと敗戦はわが国に自国の国防意識を目覚めさせ国家統一へと向っていく起因となったが、天武天皇によって神話の筆録と歴史の記述―「古事記」「日本書紀」の編纂がはじまり、「万葉集」も生まれた。このやうな歴史の流れをスクリーンに映し出された数々の和歌や記紀の言葉を紹介しながら講義は進められました。『聖徳太子の言葉に触れて―黒上正一郎著「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」をしるべに―』(内海勝彦氏・六二歳)では、講師が長年に亘り学び続けてきた演題の書物を取り上げ、太子の「勝鬘経義疏」や「維摩経義疏」の中の言葉、また「片岡山」の和歌などに、国民の教化救済をひたすら念じられた太子のお心を偲びながら、「聖徳太子の思想」を丁寧に読み解き参加者に語りかけたものでした。『日本の「国柄」―私たちの文化―』(山内健生氏・七二歳)では、現在の小・中・高の「憲法学習」には歴史との繋がりが断たれてゐる問題を指摘する一方で、それでも国民生活が秩序立って営まれてゐるのは歴史の恩恵といふほかはないと述べて「国柄」の説明へと進みました。東日本大震災時の「陛下のおことば」、連綿と続く「宮中祭祀」が示す「大御心」の連続性、地鎮祭からはじまった東京スカイツリーの建設や伊勢神宮の「式年遷宮」に見られる「新旧の不思議な共存」、このやうなことの中に「日本の国柄」は示されてゐると論じました。この合宿の特徴である「和歌創作」については、『導入講義』(池松伸典氏・六一歳)と創作和歌の『全体批評』(今村武人氏・五四歳)が行はれ、全体批評はなごやかで楽しい時間となりました。

このやうな日程の中で参加者は各講義を一心に聞き、班別討論の場では講義の資料を皆で読み味はひながら友の話に耳を傾け、自分の疑問や思ひを率直に語り、また「和歌創作」では自分が思ったこと、感じたことを三十一文字に表現するといふ作業を全員が経験しました。限られた数日でしたが、参加者は次第次第に自分が日本人であることを体験的に把握し、自国の現状と将来に思ひを馳せ、また友との語らひの中で、心からの友情も醸成されていったやうに思はれます。

この「感想文集」は合宿最後の帰り際に「走り書き」で書かれたもので、充分意を尽されたものではありませんが、心を傾けて過

ごした合宿での思ひを率直に書き留めてくれたものです。紙面の都合で全文を載せられないのが残念ですが、ご精読賜れば幸甚に存じます。

最後になりましたが、この合宿教室を実施するにあたり、今年もまた、各界からお寄せいただいたご支援に対し、会員一同に替り心から厚く御礼申し上げます。

来夏（平成三十年）の第六十三回合宿教室は、左記の通り東日本、西日本の二ヶ所で開催する予定です。

●東日本…九月七日（金）～九月九日（日）の二泊三日
静岡県御殿場市「国立中央青少年交流の家」

●西日本…八月十七日（金）～八月十九日（日）の二泊三日
福岡県福岡市「さわやかトレーニングセンター福岡」

両地区の具体的な合宿案内は来年三月頃を予定してをります。多数の皆様のご参加をお待ち致します。

第 62 回全国学生青年合宿教室（平成 29 年 8 月 11 日～13 日）於「さわやかトレーニングセンター福岡」

参加者

（学生班）（算用数字は参加学生数）

筑波大学1　横浜国立大学1　國學院大學1

早稲田大学1　皇學館大学2　京都産業大学1

大阪大学1　広島修道大学1

福岡教育大学1　福岡大学2　中村学園大学2

西南学院大学1　佐賀大学1　長崎大学7

宮崎大学1

計　二十四名（うち女子七名）

（社会人参加者）十名（うち女子四名）

（国民文化研究会）四十四名

（事務局）一名

（見学）四名

総計　八十三名

―「合宿教室」62年の歩み ―

回数	年　度	開催地	参加人員	主　　要　　講　　師
1	昭和31年	霧　島	92	広田洋二・日下藤吾・川井修治
2	〃 32年	福　岡	127	竹山道雄・高山岩男・浅野晃
3	〃 33年	佐　賀	72	勝部真長・木下彪・森三十郎
4	〃 34年	阿　蘇	160	花田大五郎・中山優・野口恒雄
5	〃 35年	雲　仙	200	木内信胤・花田大五郎・佐藤慎一郎
6	〃 36年	雲　仙	203	小林秀雄・木内信胤・津下正章
7	〃 37年	阿　蘇	215	福田恆存・木内信胤・黒岩一郎
8	〃 38年	雲　仙	202	竹山道雄・木内信胤・木下広居
9	〃 39年	桜　島	202	小林秀雄・広田洋二・木内信胤
10	〃 40年	大　分	215	岡潔・花見達二・木内信胤・夜久正雄
11	〃 41年	雲　仙	240	福田恆存・木内信胤・戸川尚
12	〃 42年	阿　蘇	336	林房雄・太田耕造・木内信胤
13	〃 43年	霧　島	353	竹山道雄・高谷覚蔵・木内信胤
14	〃 44年	阿　蘇	403	岡潔・木内信胤・木下道雄・奥田克巳
15	〃 45年	雲　仙	491	小林秀雄・木内信胤・桑原暁一
16	〃 46年	霧　島	302	村松剛・木内信胤・戸田義雄
17	〃 47年	阿　蘇	402	木内信胤・山本勝市・胡蘭成
18	〃 48年	雲　仙	433	村松剛・木内信胤・山口宗之
19	〃 49年	霧　島	528	小林秀雄・木内信胤・戸田義雄
20	〃 50年	阿　蘇	435	福田恆存・木内信胤・夜久正雄
21	〃 51年	佐世保	372	長谷川才次・村松剛・木内信胤
22	〃 52年	雲　仙	332	木内信胤・衛藤瀋吉・髙木尚一
23	〃 53年	阿　蘇	440	小林秀雄・木内信胤・松本唯一
24	〃 54年	霧　島	268	木内信胤・高山岩男・山田輝彦
25	〃 55年	雲　仙	431	福田恆存・法眼晋作・宝辺正久
26	〃 56年	阿　蘇	353	齋藤忠・村松剛・青砥宏一
27	〃 57年	霧　島	321	齋藤忠・黛敏郎・幡掛正浩
28	〃 58年	雲　仙	327	齋藤忠・小堀桂一郎・長内俊平
29	〃 59年	阿　蘇	302	吉岡一郎・小堀桂一郎・加納祐五
30	〃 60年	阿　蘇	249	市原豊太・高村坂彦・小田村四郎
31	〃 61年	島　原	294	江藤淳・村松剛・小柳陽太郎
32	〃 62年	阿　蘇	269	小堀桂一郎・鈴木一・關正臣
33	〃 63年	島　原	227	児島襄・小堀桂一郎・加納祐五
34	平成元年	島　原	204	村松剛・山田輝彦・国武忠彦
35	〃 2年	阿　蘇	204	黛敏郎・小柳陽太郎・占部賢志
36	〃 3年	厚　木	244	田久保忠衛・国武忠彦・山内健生
37	〃 4年	阿　蘇	257	村松剛・平川祐弘・奥冨修一
38	〃 5年	厚　木	271	村松剛・佐伯彰一・白濱裕
39	〃 6年	阿　蘇	253	徳岡孝夫・小堀桂一郎・絹田洋一
40	〃 7年	厚　木	240	小川三夫・長谷川三千子・東中野修道
41	〃 8年	阿　蘇	171	竹本忠雄・伊藤哲夫・坂口秀俊
42	〃 9年	厚　木	213	西尾幹二・竹本忠雄・酒村聰一郎
43	〃 10年	阿　蘇	193	小堀桂一郎・徳岡孝夫・志賀建一郎
44	〃 11年	富　士	178	井尻千男・長谷川三千子・山口秀範
45	〃 12年	阿　蘇	154	小堀桂一郎・東中野修道・布瀬雅義

回数	年　度	開催地	参加人員	主　　要　　講　　師
46	〃 13年	富　士	150	伊藤哲夫・長谷川三千子・小野吉宣
47	〃 14年	江田島	244	中西輝政・山内健生・青山直幸
48	〃 15年	富　士	171	小堀桂一郎・伊藤哲夫・占部賢志
49	〃 16年	阿　蘇	169	中西輝政・小田村四郎
50	〃 17年	伊　勢	219	長谷川三千子・松浦光修
51	〃 18年	霧　島	191	井尻千男・吉田好克・占部賢志
52	〃 19年	奈　良	175	小堀桂一郎・小川三夫・小野吉宣
53	〃 20年	伊　勢	150	伊藤哲夫・占部賢志
54	〃 21年	厚　木	160	長谷川三千子・ペマギャルポ・占部賢志
55	〃 22年	阿　蘇	151	中西輝政・小柳左門
56	〃 23年	江田島	141	小堀桂一郎・山内健生
57	〃 24年	阿　蘇	152	竹田恒泰・小柳志乃夫
58	〃 25年	厚　木	142	伊藤哲夫・國武忠彦
59	〃 26年	淡　路	108	中西輝政・小柳左門
60	〃 27年	富　士	115	長谷川三千子・小柳志乃夫
61	〃 28年	福　岡	74	今林賢郁
		富　士	69	石平・今林賢郁
62	〃 29年	福岡	83	山内健生
累計・参加人数			15,042 名	

第62回 全国学生青年合宿教室　日程

	8月11日(金・祝)	8月12日(土)	8月13日(日)
6:30			
7:00		起床・洗面	起床・洗面
		朝の集い	朝の集い
8:00		朝食	朝食
9:00		講義 (聖徳太子の言葉に触れて) 内海勝彦氏	短歌全体批評 今村武人氏
10:00			班別相互批評
11:00		班別研修	合宿をかえりみて
12:00		短歌導入講義 池松伸典氏	全体感想自由発表 感想文執筆
13:00		・写真撮影	閉会式 昼食 (13:30解散)
14:00	(14:30開会)	(車中昼食弁当)	
15:00	開会式 オリエンテーション	屋外研修(宗像大社)	
	班別自己紹介	・短歌創作	
16:00	合宿導入講義 (学問と人生―小林秀雄に学ぶ―) 飯島隆史氏		
17:00	班別研修	(短歌提出)	
18:00	夕食 入浴 休憩	夕食 入浴 休憩	
20:00	古典講義 (国の目覚めと万葉集) 小柳左門氏	講義 (日本の「国柄」-私たちの文化-) 山内健生氏	
21:00			
22:00	班別輪読	班別研修	
23:00	就寝 消灯	就寝 消灯	

第六十二回「合宿教室」（福岡）のあらまし

第一日目　（八月十一日・金曜日）

第六十二回全国学生青年合宿教室（福岡）は、福岡県福岡市香椎浜の「さわやかトレーニングセンター福岡」にて開催された。北は茨城県、南は宮崎県から集った参加者は、それぞれの思ひを胸に受付を済ませ、開会式に臨んだ。

開会式

合宿教室は横浜国立大学理工学部二年渡辺幹成君の開会宣言で幕を開けた。今林賢郁理事長は開会の挨拶で、「物事に取り組む時に自分の目で見て、自分の心で感じて、自分の頭で考へると、その経験の積み重ねで国も個人も次第に独立なり自立の意思といふものが蓄積され育ってくるものと思ふ。そして次第に存在感を示すやうになり、他人からも他国からも信頼され敬意を持たれるやうになる。その点今のわが国は、極めて覚束なく心許ない。アメリカの占領政策は日本人の精神をズタズタにしたが、戦後七十二年、独立回復から六十五年を経て未だにそれを脱却できないとすれば、これは私ども日本人の問題だ。一刻も早く独立、自立の意思を取り戻さなければならない。縁あって集まった仲間と、堂々と、そして率直に話し合ってもらひたい」と述べた。

次いで武澤陽介合宿運営委員長は「この合宿ではひとつでも沢山の〝日本の心〟に触れて下さい。自分の意見を主張するのではなく人の話をよく聞くことに心を留めて欲しい」と呼び掛けた。

合宿導入講義　「学問と人生 ―小林秀雄に学ぶ―」

埼玉県庁企業立地課　飯島　隆史　氏

四十三年前、学生時代に参加したこの合宿教室で「小林秀雄」に初めて出会った。その時の演題が「信ずることと知ること」であった。小林秀雄は講義の冒頭で超能力者ユリ・ゲラーの壊れた時計を動かすといふテレビの実験の話をした。さういふ「不思議」に対する知識人達の「不思議」を「不思議」として扱ふことの出来ない態度は、小林さんにとっては面白くないものだった。次にベルグソンのエピソードに移って、小林さんはある夫人が、戦場で亡くなる夫の姿を、同時刻に夢の中でまざまざと見たといふことを紹介した。「精神感応」「テレパシー」のことを語ったのだ。つまりは「合理主義」では説明出来ない話をされた。

また、小林さん自身、母上の魂が「火の玉」となって現れたことを『感想』に書いてゐる。これも「合理主義」では到底説き明せない事柄である。小林さんの『無常といふ事』には、小林さんの痛切な歴史体験を紹介されてゐる。本当に歴史を「思ひ出す」といふことは「合理主義」の考へからは出て来ないのではないか。ベルグソンの話は夫婦間のことであり、小林さん自身のそれは親と子の話である。「歴史的体験」でも同様で、魂と魂の触れ合ひが必要なのである。

小林秀雄の著作に江戸後期の国学者・本居宣長について述べた『本居宣長』があるが、宣長は「うひ山ぶみ」の中で、「学問」は「ただ年月長く倦ずおこたらずして、はげみつとむるぞ肝要」と指摘してゐる。「真の学問」とは、現代の「合理主義」的なものではなく、真に心が震へるやうに「感動」することから生れると思ってゐる。

講義終了後、参加者は各班室に戻り、導入講義についての班別研修を行った。講義内容を正確にたどりながら、講師の最も伝へたかったこと、重要なことは何かを確認し、その上で各々の思ふことを論じ合った。なほ、この班別研修は、以後の各講義の後にも行はれた。緊張のせゐか、初めのうちは意見も少なく発言も限られてゐたが、お互ひに打ち解けるに従ひ次第に討論も活発となり、班員相互の交流が深められていった。

古典講義

「国の目覚めと萬葉集」

社会医療法人原土井病院院長　小柳左門氏

今回の合宿地であるここ筑紫は古くから外国との交流の玄関口であり、『古事記』や『日本書紀』『万葉集』の舞台となった。古代史の中で、七世紀後半、朝鮮半島の白村江での戦ひは国家の運命をゆるがすきっかけとなった。唐と新羅の連合軍によって滅ぼされた百済の遺民は、救ひをわが国に求め、斉明天皇は自ら大船団を率ゐ、瀬戸内海を渡って遠く筑紫を目指された。その途中、愛媛の海岸で額田王が詠んだのが「熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今はこぎいでな」の大らかで勇壮な名歌である。

しかし斉明天皇は筑紫の朝倉の宮で崩御。悲しみの中で大軍は白村江を目指したが、たちまち敗戦。これを指揮した天智天皇は敗戦の大きな痛手により、対馬や筑紫から瀬戸内海にかけて築城し、防人を置いて国防を充実させ、都を近江に遷した。「遠の朝廷（とほみかど）」とよばれた大宰府が外交防衛の枢要な機関となり、都から派遣された官人（大伴旅人や山上憶良ら）によって『万葉集』を代表する名歌が生まれた。

天智天皇崩御の後、壬申の乱を経て天武天皇による国家の統一が図られ、その詔によって国の精神的根幹をなす神話の筆録と歴史の記述、すなはち『古事記』『日本書紀』の編纂が始まった。また漢字の音訓を使って大和言葉（国語）で和歌を表記した『万葉集』は先人の努力によるものであり、それによって私たちは古代の人々の心を知ることができる。『万葉集』でもことに心を打つ「防人の歌」を数多く採用したのは大伴家持である。

国の宝である記紀万葉が遺されたのは、国の命に目覚めた先人のお蔭であった。

第二日目　（八月十二日・土曜日）

合宿の日程は「朝の集ひ」から始まる。参加者全員での体操の後、本会会員による文部省（現文科省）唱歌の紹介、説明の後、斉唱した。唱歌と歌唱指導担当を左に示す。

《八月十二日（土）》　「海」　武澤陽介（上野学園高等学校）
《八月十三日（日）》　「元寇」　森田仁士（豊司会　新門司病院）

講義　「聖徳太子の言葉に触れて

—黒上正一郎著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』をしるべに—」

（株）IHIエアロスペース　内海　勝彦　氏

今年春に文科省が出した現行の「聖徳太子」の表記を「厩戸王（聖徳太子）」に変更するといふ中学校次期学習指導要領改定案は、日本人の記憶の歴史を絶たうとするものであった。日本の国作りと日本人の精神的支柱となってきた太子の御思想を遺された言葉に拠りながら辿ることが本当の歴史教育ではないか（ここで太子に関する系図と年譜が示され、太子の思想について「三経義疏」の一節や「片岡山のみ歌」等に触れながら具体的に講述）。

『勝鬘経義疏』の「聲は以て意を傳へ、書は以て聲を傳ふ」では経典に向ふ太子のお姿が想ひ浮ぶ。『維摩経義疏』の「国家の事業を煩と為す。但大悲息むことなく、志益物を存す」からは、内政改革や外交などの外に現れる事績に

究極の価値を求めることなく、太子が国民の教化救済を第一に念じられてゐたことが偲ばれる。また同経典に「悲能く苦を抜く」といふ言葉があるが、平成二十七年五月に天皇、皇后両陛下がパラオ国ペリリュー島へ慰霊の旅をされた際のお姿が髣髴と浮んでくる。両陛下の国民一人一人に寄り添はれるお心が、戦後を生きてきた人々の苦難の人生を包み込みその苦しみを癒された。ここには太子の「悲能く苦を抜く」のご教示そのままの精神世界がある。

さらに「世間虚假唯佛是眞」について、十二年前に若くして癌で亡くなった同学の友は病ひの宣告をされた時に、「〝世間虚假唯佛是眞〟と唱へつゝ進行癌と闘ひをるなり」「愚かなる我にしあれど聖王の御言葉誦しつゝ生きてゆきたし」と、この太子のお言葉を歌に詠んだ。

この太子のお言葉には、世の中はむなしいとそこから逃げるのではなく、その世間にどっぷりと浸かりながらも、その中で真心を尽さうとされる積極的な意志が感じられる。それは、太子が現実人生の中で常に国民の教化救済を願はれて苦闘されたお姿に通じるものだ。太子は国民皆が、欠陥ある自分であることに目覚めて、互ひに心を通はせ合って生きてゆける精神世界を目指されてゐて、日本の国を〝真心の幸ふ国〟にしたいと願はれてゐたと思ふ。

短歌創作導入講義

若築建設（株）東京支店　池松　伸典　氏

短歌は自分の思ひを素直に言葉に表現することが基本である。国文研の「東京短歌の会」では日々の暮しの中で感じたことを詠んだ歌が発表されてゐる。率直に詠まれた歌は表現の巧拙は別として他者に伝はる。

明治天皇の御製に「おもふことうちつけにいふ幼子の言葉はやがて歌にぞありける」とあるが、このやうなお歌に触れると日々の生活の中でだんだんと忘れてしまってゐた自分の「まごころ」「まこと」を見つめ直すことの大切さに気づかされる。

合宿教室必携書『短歌のすすめ』には著者の夜久正雄、山田輝彦両先生の思ひがどの頁にも込められてゐる。合宿教室で続け

られてきた短歌創作の意義と「短歌が学問の中心となる」との言葉の意味を深く味はってほしい。現代は、さらに「生活が豊かになる一方で、「心情・感情の洗練」がますます蔑ろにされてゐるのではないか。「人の心のまこと」とはどういふものなのか。

ここに日々成長するわが子を詠んだ若い母親の歌がある。「手のひらを洗ふがごとくばしゃばしゃと手を擦り合はせて水と遊べり」「〝帰るよ〟の声に一度離れるも駆け戻り跳ぶ水たまりの中」。この短歌からは吾子の具体的情景の描写を通して母親のまなざし、愛し子に注ぐ溢れるばかりの愛情が伝はってくる。

小林秀雄の『美を求める心』に「画家が花を見るのは好奇心からではない。花への愛情です。愛情ですから平凡な菫の花だと解りきつてゐる花を見て、見厭きないのです」と書かれてゐるが、右の母親の歌を読むとこの小林秀雄さんの言葉もなるほどと感じられてくる。自分の感じたことを飾らずに詠むように努めて欲しい。

野外研修（宗像大社参拝と短歌創作）

短歌創作導入講義聴講の後、短歌創作を兼ねて参加者は、バスで宗像大社（福岡県宗像市）へと向った。

宗像大社では、まづ昇殿参拝の後、神官の案内で、「高宮祭場」を拝して、神宝館を見学した。

高宮祭場は、天照大御神の御子神の三柱の女神が高天原から降った「降臨の地」と伝へられる所で、神籬（神霊の憑依する樹木）を依代とし、社殿が建てられる以前の古い祭祀（庭上祭祀）を継承する全国でも稀な祈りの場である。神話に連なる祭場は生ひ茂る木々に囲まれて木漏れ日の中に聖なる佇まひを見せてゐた。参加者はそれぞれの思ひを込めて静かに拝礼してゐた。

神宝館では、宗像大社に長年伝承されてきた重要文化財などが収蔵展示されてゐて、ことに九州本土から海上遙か六十キロの沖ノ島（宗像大社沖津宮の鎮座地）出土の「八万点の国宝」が交代展示されてゐる。数々の歴史的な展示品に、参加者は時の過ぎるのを忘れるほどだった。

講義

「日本の『国柄』―私たちの文化―」

元 拓殖大学日本文化研究所客員教授　山内　健生　氏

「日本国憲法」は被占領といふ非常時に日本の弱体化を企図するＧＨＱ（連合国軍総司令部）によって起草されたものだが、小・中・高で繰り返される「憲法学習」では平和憲法などとむしろ好ましいものとされてゐる。ＧＨＱによる「中毒作用」intoxicationが未だに利いてゐる感じで、自分の国の歴史が見えなくなってゐる。例へば憲法前文にある「他国に自国の安全を託す」旨の一節は批判されることがあるが、もっと問題なのは「われらはこれに反する一切の法令及び詔勅を排除する」との文面である。わが国の歴史的な特性（国柄）を全否定してゐる。

柳田国男は国民とは「現在の国民」だけではなく「祖先」も「子孫」も国民だと言った。チェスタトンは「伝統とは選挙権の時間的拡大だ」と言った。現在の国民が選挙に参加できない先人に思ひを馳せながら選挙権を行使するといふことだが、「憲法学習」では、歴史（先人）との繋がりが全く無視されてゐる。

さうした「憲法学習」にも拘らず国民生活が秩序立って営まれてゐるのは歴史の恩恵といふ他はない。東日本大震災から五日後（平成二十三年三月十六日）、夜七時のニュースで流された「陛下のおことば」がどれだけ人々に安心感を与へたかは計り知れないものがあった（ここで「陛下のおことば」を拝読しつつ紹介）。

百二十五代の今上陛下は、民を「大御宝（おほみたから）」とされた初代・神武天皇のご精神を追慕されて毎年四月三日に神武天皇祭を厳修されるほか、一月七日の昭和天皇祭をはじめ、例へば反正天皇千六百年祭（平成二十二年二月十三日）のやうに百年毎の例祭も営まれてゐる。これは世界史的にも例のない連綿たる「大御心」の連続といふ「国柄」を示すもので、そのもとにあって国民は互ひに他者を尊ぶ生き方を実践してゐる。

東日本大震災の際、治安が乱れず暴動が発生しなかったと外国メディアは驚いたが、日本人には当然のことだった。他者の気持を大事にするから、使ふ人の立場に立って作られる日本製の電化製品や自動車は故障が少ないのだ。かうしたことが一朝一夕で生れるはずもなく、まさに歴史的な「国柄」の現れである。

伊勢の神宮では七世紀末から二十年ごとに新宮を造営することを六十二回も繰り返し今日に至ってゐる。伊勢では「古い形のお宮がいつも新しい姿で立ってゐる」。最先端の技術を駆使した世界一高い東京スカイツリーの建設は大地の霊を鎮める古くからの地鎮祭から始まった。外国人は「新旧の不思議な共存」と言ったが、日本人には不思議ではない。「新旧の共存」も「国柄」を示すもので、もし「旧」がなくなれば、〝日本〟ではなくなるのだ。

今日、午後参拝した宗像大社は高天原から降った三女神をお祀りしてゐる。降臨の地「高宮祭場（たかみやさいじょう）」も拝した。三女神の降臨は八世紀初めに記録された記紀神話に出てくるから、その祭祀の歴史はもっと古いことになる。五度の来日経験を持つ人類学者レヴィ＝ストロースは「西洋では、何世紀も昔から、神話と歴史を区別するように努力して来た」が、「日本の魅力の一つは、神話も歴史もごく身近のものだという感じがすること」だと言った。われわれは宗像大社で神話と歴史の生きた連続性を目の当りにした。かうした神話に連なる遺蹟は国内にいくらでもある。

神話と歴史が繋がってゐるのもわが国の特質「国柄」である。

かれこれ見てくると歴史的特性（国柄）に背を向けた「憲法＝憲法学習」には慄然たるものを覚える。

第三日目　（八月十三日・日曜日）

創作短歌全体批評

熊本県立第二高等学校教諭　今村　武人　氏

一般的に「批評」といふと、他人の意見や作品を高みに立って一方的に評価を下すことのやうに理解されるが、この短歌相互批評においては、さうした態度は厳に慎まなければならない。短歌創作に取り組んだ人はすべて、わづかな時間の中で、自分の心を見つめ、言葉を選び、指を折りながらも精一杯の努力を傾けて歌を作られたと思ふ。高みからの批評にはそれへの共感がないと思ふからである。そこで相互批評の際は、作者がどういふ思ひで歌を詠んだのか、歌を作ったときの感動や心情などをよく聞き、その作者の気持ちに寄り添ってほしい、そして作者と一緒になって最もふさはしい表現を考へて、適切な言葉に直して行くやう心掛けてほしい。

短歌は、歴史的仮名遣ひを用ゐて文語体で表現することが必要である。口語体では、特に助動詞や助詞の使用にかなりの制限があり文法的に表現の幅が広がらない。さらに私たちが歴史的仮名遣ひや文語体を学ぶことで古典がより身近のものになり、祖先との言葉（命）のつながりを深めることができるからである。

（その後、前夜刷り上がって全員に配られた「歌稿」に拠りながら、宗像大社参拝のときの歌や、班別研修のことを詠んだ歌など、実際に参加者の作った歌に則して批評の実例が示された）。

班別短歌相互批評

全体批評のあと班別短歌相互批評が行はれた。自分の心の動きを正確に表現し相手に伝へることの難しさ、また人の言はんとしてゐることを正確に受け止めることの難しさを実感させられた。一首一首の短歌を、班員全員が納得できる表現にするため尽力し、自分の心、相手の心をじっくりとみつめるといふ貴重な体験をすることが出来た。

合宿をかへりみて

国民文化研究会理事長　今林賢郁氏

初日の合宿導入講義から最終日の短歌相互批評まで、様々なことが語られ話されたが、ふり返ってどのやうに感じてをられるだらうか。この合宿で取り上げられた詩や文章（古典）は大変難しかったかとも思ふが、書かれてゐることがおぼろげながらでも分ったり、先人の思ひを感じることができたのではないか。千数百年前に書かれた文章を現代に生きる我々がその気になれば読むことができるといふことは有難いことであり、世界でも稀有なことである。

「国力」とは通常軍事力や政治力、外交力のことを言ふが、二千年来の連綿と続いてきた歴史があり、先人の生き方や価値観が書かれた古典を現代に生きる我々がいつでも読むことができるといふこと、これこそ「国力」であると言っていい。さういふ「国力」を持つ国に生れて生きてゐることを自覚し自信を持たうではないか。開会式で我が国の現状を見ると一刻も早く国民一人一人が自立と独立の気概を取り戻さなければならないと述べたが、そのための糸口はこの二泊三日の合宿研修で掴んだのではないか。後はこれからの皆さん一人一人の心構へにかかってゐる。

全体感想自由発表

（閉会式を前にして、参加者が次々に壇上に立ち、三日間の研修で感じた思ひを率直に述べた）

「聖徳太子の『憍（きょう）は悪の中の極』といふ言葉に触れて、自分の人生姿勢や人への思ひの在り方に気付かされた」「万葉集を味はふ講義を聞いて、額田王や防人の歌に情景が浮かんできて、心を動かされた」「日本の国柄に触れた講義を聞いて、歴代天皇が持たれてゐた大御心をもっと勉強したいと思った」「班別研修は、『相手を打ち負かすディベート』とは違ってゐた。人の言葉に

真剣に耳を傾け、自らも心を開いて語らうと努める体験が新鮮だった」「短歌の相互批評では、自分が思ひを語り、他の班員がかうなんじゃないかと言ってくれて、歌ができていく感じが良かった」「国家の安全保障問題に重ね合はせて、自分たちの国に信を持つ。それには、どのやうな国で生きてゐるのかをよく知り、一人一人が日本人としての魂をよみがへらせていくことが大切だと思った」等々…

閉会式

主催者を代表して山口秀範常務理事は、「この合宿に参加して心に動いたこと、気付いたことを一つでも二つでも大事にしていただきたい。そして、学校や職場に戻って少しでも大きなもの確かなものにしていただきたい。『物と苦楽を同じうす』といふ聖徳太子の言葉がある。私たちはともすれば独り善がりになったり物が分った気になることもあるが、自分だけの世界に閉ぢこもるのではなく、各地にある勉強の場にも参加して友達や仲間に思ひを伝へていただきたい」と述べた。

続いて、武澤陽介運営委員長は、「開会式で日本の心に触れる体験をしていただきたいと述べた。合宿が終れば、また日常の生活に戻ることになるが、この合宿で得られた体験や感動の光を大切にしていただきたい」と語った。そして、大阪大学基礎工学部三年守田壮輝君の閉会宣言で合宿教室は幕を閉ぢた。

合宿運営

【本　部】

運営委員長

上野学園高等学校　武澤　陽介
ＩＢＪＬ東芝リース（株）　小柳志乃夫
元　（株）アルバック　北濱　道
朝倉公共職業安定所　古川　広治

【指揮班】

指揮班長

（株）ラック　髙橋俊太郎
豊司会　新門司病院　森田　仁士
新日鉄住金ソリューションズ　鷲頭　祥平
Ｈｕｂａｘ（株）　岡部　智哉

【事務局】

事務局長

元　東急建設（株）　奥冨　修一
元　日商岩井（株）　栗方惠美子
元　川崎重工業㈱　澤部　壽孫
国民文化研究会事務局長　山本　博資
大成建設（株）　磯貝　保博
川井　泰彦

走り書きの〝感想文〟

これは閉会間ぎはの一時間余で参加者全員に、三泊四日間の感想を走り書きで書いてもらったものです。「仮名遣ひ」は原文のままで掲載してあります。

なほ、各人の感想文の末尾に小さい活字で載せられてゐる短歌は、この感想文とともに提出された第二回目のものです。

男子学生第一班

共に学んでいく喜び

（㈱ハウインターナショナル　桑木康宏　41歳）

優秀な学生の揃った班だったので、何かを教えたり伝えたりするのではなく、友らと共に学び、語り合う喜びを、久しぶりに思い出させていただけた合宿でした。

自身の中に確定的な答えのようなものもないままに、自分の中にあるものを掘り起こし、素直な自分を出して友らと語り合う。この営みを通じて、自己の中に「守り伝えていくべきもの」を確認していく。

自分にできるのは「答えがなくても、更に次の世代と共に学び続けていくこと」なのかと思い至らせていただくとともに、共に学ぶ喜びを思い出させてくれた友らに感謝します。

各々に思ひを持ちて集ひ来し友らと語り共に学びぬ

班友の熱情に身を正される

（筑波大学大学院　人文社会科学　一年　横川　翔）

常日頃よりだらしのない生活をおくっておりますが、合宿参加後のしばらくは規則正しい良い生活を営むことができます。ただ、「しばらく」に過ぎないのが困ったもので、完全な更生とまでは至らないというのは、私の性なのだと思います。

とにかくですけれども、班友が折々に発する熱情に私は影響を被っており、おかげをもちまして、今回も数か月はまっとうな生活が送れそうです。

友の詠む歌の数々拝すれば吾が眼前に友居る心地す

四度目の正直とする決意

（皇學館大学　文　四年　江崎義訓）

今回で合宿の参加は四度目になるが、やはり四回すべて参加して良かったと思っている。毎回、この合宿が終わった後は、勉強しようと思い立ち、本屋で書籍を購入するが、そのうち忘れてしまうというのが過去三回であった。

時に、毎回心を動かされるのが短歌の講義で、短歌の本を買う度に棚に積み上げているのみで全く進歩がない。今回も小柳左門先生の万葉集の講義に心を動かされ、もう一度万葉集にトライしようと考えている。来年は奉職一年目ということもあり、合宿への参加は困難であることが見込まれる。それゆえ、退路を断つつもりで真剣に取り組むつもりだ。

宗像の大神吹かす神風に吹かれて揺るるみしるしの木

今を生きる自分たちに求められているもの

（佐賀大学　文化教育　四年　藤近晃久）

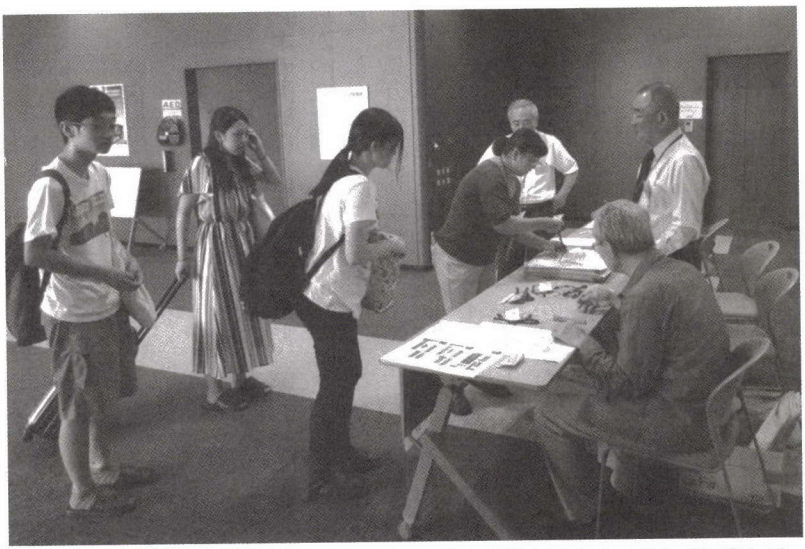
今回の合宿で特に心に残ったのは、山内健生先生が講義でおっしゃられた「日本全体がマヒさせられているような状態」との言葉です。北朝鮮と米国間での事態が緊迫化する中で、日本国内では政府を貶める声や批判が行われています。国民の戦う相手が日本を脅かす他国ではなく、国内の政府にすり替えられている。このマヒから目覚めるためには、先人の思想のこもった古典、受け継いできた文化、独立を守り継いできた歴史を自分自身に蘇らせることが大切だと思います。連綿と続くものを自らに蘇らせ、そして自分自身の生き方に現すこと、それが今を生きる自分たちに求められているものだと感じます。戦後改革とその結晶である憲法にむしばまれている精神を、古典（日本）への感動から、力強く払しょくしていく心が大切だと思いました。

「日本人らしさ」をどう蘇らせるか

（福岡教育大学　教　三年　堤　正史）

今回の合宿において、最も感銘を受けたのは山内健生先生のご講義でした。その中でも特に、今上陛下の東日本大震災でのメッセージにおいて、国民の隅々まで心にかけられる陛下のお言葉に大変感動しました。また陛下が歴代天皇のお祭りをしていらっしゃることも初めて知り、陛下が歴史の伝承者であると感じました。

そのもとで、いま歴史が断絶されています。「日本人らしさ」



全国から集った参加者は、それぞれの思ひを胸に受付を済ませ、開会式に臨んだ。

をどのように蘇らせるのかということを考えると、私は聖徳太子と、明治天皇が思われました。日本には大変な時代、日本の国柄が分からなくなった時に日本とはこういう国だと示された先人がいらしゃる。今の我々はその方々から学ぶことで、今の世を切り開けると思います。

今の世に日本の国柄とり戻さむ先人の知恵を学び続けて

学び続けていきたい

（長崎大学　教　二年　戸川裕介）

今回の合宿で聖徳太子が日本人の基礎を作っていったのだと改めて感じました。大変な時代情勢でありながらも和の心を大事にされ、「愚人の一つの優れた徳業は知恵のある人の師である」とおっしゃられるほど、他の人のことを大事に思われていたのだと感じました。どうしてそこまでの精神力をもっていらっしゃったのかは正直まだわかりません。それは憲法十七条、三経義疏を学んでいく中で勉強してみたいと思います。

また、国柄というお話において、憲法は国柄を表すものだと聞いた時、改めて今の憲法の文章は日本の国柄、伝統とあっていないと感じました。三大原則の中に第一条の天皇条項がない、義務の中に国防がないなど、知ってはいたけど、それに違和感を持たなかった自分もまた、まだまだ戦後の占領政策のマヒが抜けきっていないのだと改めて感じました。これを脱していくためにも、日本とは何なのかをまた一から考えていく必要があると思いました。

合宿の学びを更に深めていきたい

（福岡大学　経　二年　西田忠正）

この三日間で一番興味を惹かれた授業は、山内健生先生の日本の国柄についての授業です。憲法というものは、理想に向かって行動するための指針のようなものだと思っていました。しかし、実際は過去を内包するものだと知り、憲法に対する見方が変わりました。

また、チェコの作家であるミラン・ヒューブルの言葉である国民の消し方を見て、アイデンティティの重要さを認識しました。このお話を伺い、ユダヤ人が民族を失わなかったのは、旧約聖書という本のおかげかなと思いあたりました。

この合宿で学んだことをもう一度自分の中で学びなおしたいと思います。

晴れ渡る学びの庭で語り合ひ友と学びて短歌詠みたり

若き友らへ

（元　熊本市役所　折田豊生　66歳）

短い合宿だった。少人数の合宿研修は、例のごとく志ある人々の集まりになり、内容が充実してゐた。班別の研修は毎

回時間が足りないほどに意見が交はされた。実に愉快な合宿だった。諸兄に改めてお礼を申し上げたい。

班別研修にて

もろともに知恵を傾け語らへば惜しまれてはや過ぐるたまゆら

国を思ふ深き思ひを言の葉の端々に聴く若き友らゆ

国のいのちたどりてゆけば果てもなき学びの林の深さ知らさる

このにはをさかりゆくとも呼び交はしかたみに学び合はなむ友らよ

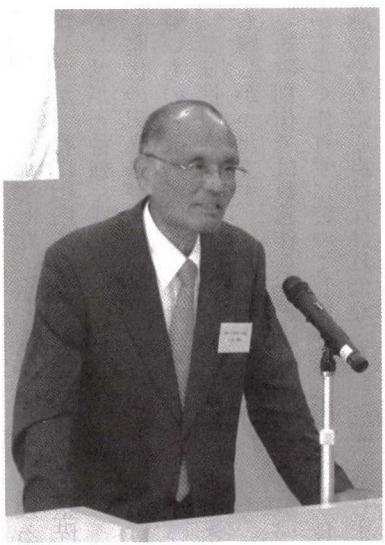
感動する心を鍛えたい

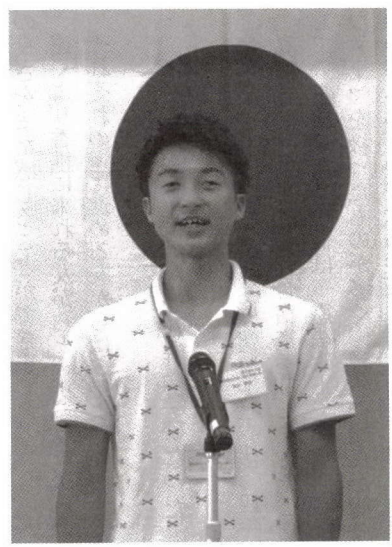
（全日本学生文化会議　坂本匡史　29歳）

小柳左門先生が本当に嬉しそうに、楽しそうに、感動に満ち満ちた言葉で語られる万葉集と先人の心ばえに感動しました。「我が身を売りて、衣食に充てよ」と言った大伴部博麻の姿、「名ぐはしき印南の海の沖つ波千重に隠りぬ大和島根は」との歌の美しさ、古典の文一言にも先人の真剣な生が生きています。

私は心を動かすことなく読み飛ばしていることが多いことに情けなく申し訳なく、もったいなく感じました。同時に、いかに豊かな言葉の世界を先人から受け継いでいるのか、と感動しました。

カメラ・レポート2





開会式。合宿教室は横浜国立大学理工学部二年渡辺幹成君（右）の開会宣言で幕を開けた。主催者を代表して今林賢郁理事長（左）は、「自分の目で見て、自分の心で感じて、自分の頭で考へ、縁あって集まった仲間と、堂々と、そして率直に話し合ってもらひたい」と挨拶した。

私たちは日本を守りたいと考え学んでいますが、まず感動をする心を鍛え、守りたいものを見つめる力をつけたいと感じました。

男子学生第二班

心に感じたことを言葉にしよう

（平山直樹税理士事務所　北村公一　50歳）

昨年の西日本合宿では別日程となってゐた短歌創作が同一日程中に復活し、たいへん嬉しく思ひました。

男子学生班の班長に任命いただきました。班別討論では、班員は懸命に自分の気持ちを言葉にしようとしてくれました。また、頭で考へるのではなく、心に感じたことを語らうとしてくれました。それぞれの心に、何か一つでも残るものがあれば、と願ひます。

時に暴走しがちな私を的確にフォローしていただいた白濱裕先生、本当に有難うございました。

食の進まぬ友を気遣ひ何くれと声かけくるる班員有難し

山内健生先生のご講義が心に残った

（皇學館大学　神道学専攻科　一年　名和長高）

二回目の参加でした。全てのご講義に心に残ることがありましたが、特に山内健生先生のご講義での天皇陛下についてのお話が一番強く残ってゐます。

歴代の天皇様が国民を思ってこられた大御心は本当に有り難いものと改めて感じました。

二日目の宗像大社では拝殿での正式参拝をできた事がとても嬉しかったです。

短歌創作では数首作らうと思ってゐましたが、結局一首しか上手く作れずに終ってしまひました。やはり日頃から歌を詠むやうに心掛けなければならないと深く感じました。

新たに出会った友と語り合ふことができて、この合宿教室の良さをまた感じることができました。

遠くより香椎に来れる友がらと一年ぶりに語るは楽しき

それぞれの道に進める友がらは去年より姿大きく見えけり

イデオロギーではない新鮮な学びだった

（広島修道大学　法　四年　田中壯卓）

私は今回、初めてこの合宿に参加しました。普段私が参加している講演会や合宿は、憲法改正や大東亜戦争など具体的なテーマを扱ったものが多く、議論の論点が明確で、一見とっつき易いものではあります。

しかしこの合宿は「学問とは」「万葉集」「聖徳太子と仏教」「国柄」という、イデオロギーではなく人の心や国に直接関

わるテーマが多く、私にとって新しく触れるものばかりで、大変新鮮で勉強になりました。

神々の護りによりて国運をかけし戦に勝ち得たりしか

一人では太刀打ちできない文章を読めた

（大阪大学　基礎工　三年　守田壮輝）

今回私は初の合宿参加でした。来る前は不安が多く、三日間乗り切れるかということばかりを考えていました。

講義では、小林秀雄さんや聖徳太子など、私一人では難解で手もつけられないような内容を、丁寧に解説されたので、知識量の少ない私でもなんとか文章を読み、また考えることができました。また、講義の後に行われた班別研修では、他の参加者の意見や考え方を聞くことができ、より一層理解を深めることができました。

講義で触れられた内容はほんの一部であり、他にも学ばなければならないものが沢山あると思うので、今後自ら学んでいきたいと思います。

先人の遺せし言葉を聞きながら我が生き方をかへりみる日々

短歌創作と相互批評が楽しみ

（京都産業大学　経営　三年　船岡龍一）

今回で三回目の合宿参加になりました。二泊三日があっと

カメラ・レポート3

オリエンテーション。武澤陽介合宿運営委員長（右）は、。「この合宿ではひとつでも沢山の〝日本の心〟に触れて下さい。自分の意見を主張するのではなく人の話をよく聞くことに心を留めて欲しい」と呼び掛けた。高橋俊太郎合宿指揮班長（左）は、合宿生活を営む上での諸注意を説明した。

いう間に感じられました。今回も日常では学ぶことができない多くの事柄を勉強でき、人生の糧と思っています。

私は毎年、歌を詠むことを楽しみにしており、今回は初めて宗像大社にも参拝し、新しい体験を基に多くの短歌を詠むことができました。また、短歌の相互批評では時間が足りないくらい語り合い、班の仲間と心を通わせ合うことができたと思います。他の講義の後の班別研修でも、班の仲間達と率直な意見をぶつけ合うことができました。来年もまたこの合宿に参加することを心から楽しみにしています。

仲間らと目を見交して語り合ひ心通はす時ぞ楽しき

先人の言葉により生き方を省みる

（長崎大学　環境科学　一年　中村祐哉）

私は大学で「日教研」というサークルに入り、初めて和歌の良さに気付きました。生まれて初めて、自分のために短歌を詠んでいただいて、感動し、自分も誰かのために詠みたいと心から思いました。短歌を学んでいくうちに、御製にも出会いました。

今回の合宿で、今上天皇のお言葉や御製を学び、陛下が国民を思われるお心はいつまでも変らず、本当に感動しました。この合宿では自分の未熟さに改めて気付かされ、新たなことを多く学び、難しい内容が多かったのですが、とても成長できました。これからも天皇や先人、先生方のお話や言葉をたくさん学び、その言葉を心に留めて生活し、常に自分の生き方を省みたいと思います。

毎日が相手の長けるとこ見つけ伝へたり得る我れでありたし

内憂外患、日本存亡の危機に当りて

（元　熊本県立大津高等学校校長　白濱　裕　65歳）

短い期間であったが、それぞれの講義の密度が高く、また班員の意識も高く充実した合宿だった。先づは、武澤陽介運営委員長を始め、スタッフの皆様に厚く感謝いたします。

今日の日本の内外の情勢を省みると、内には偏向したマスコミや無責任な野党による些末な根拠の無い安倍政権打倒に焦点を絞ったスキャンダルの暴露、外には北朝鮮のミサイルによる国土防衛の現実的脅威など、国家存立の危機が迫ってゐるとの認識を国民等しく持つべき秋に至ってゐると言って良いと思ふ。

今林賢郁理事長のお言葉の如く、「日本人としての自覚」と「独立の気概」を取戻し、憲法を始めとする「麻酔」から一日も解き放たれることが喫緊の課題である。その為にも、この合宿が若い世代に志を継承する最大の取組みであると確信した次第である。

班員諸兄へ

縁（えにし）得て出会ひしみ友らこれよりも学びゆきたし助け交して

男子学生第三班

万葉集から偲ばれた国の目覚め

（祐誠高等学校教諭　小林国平　39歳）

今回は班長をさせて頂き、自分が学ぶことよりも、学生の学びが深まる為に出来ることをよく考えました。本当に素直で一生懸命な学生六名で、「難しい」と感じた講義も、班別研修でお互いに感想・意見を述べ合う中で、自ずと学びの本質に近づいていく過程を見させてもらい、逆に学ばせてもらいました。また、小柳左門先生のご講義では、万葉歌人や防人の歌から大切な人と別れても国に尽くした心情が偲ばれ、白村江の戦いに敗れた奈良時代の日本に、国を守る意識が国の目覚めとして感じられました。約千三百年の時が過ぎても、天皇から民・百姓まで、当時を生きた人達の思いと姿を伝える万葉集を今後学んできたいと思います。

お互ひに素直な思ひ述べ合へば自ずと学びは深まりゆきけり

悲しみを胸に国守る先人の思ひ偲ばす万葉の歌

如何にして生きるべきなのか

（國學院大學大学院　文学研究科　一年　大貫大樹）

本合宿は、改めて如何にして生きるべきなのかを考える合

カメラ・レポート4

合宿導入講義。「学問と人生―小林秀雄に学ぶ―」と題して飯島隆史氏は、本居宣長の「うひ山ぶみ」の一節「学問は、ただ年月長く倦ずおこたらずして、はげみつとむるぞ肝要」を紹介し、真の学問とは、真に心が震へるやうに「感動」することから生れると思ってゐる、と訴へた。

宿であった。二日目、内海勝彦先生の御講義では、聖徳太子が万民(衆生)の苦しみを享受され、その上で人々に慈愛を施される、その御精神について拝聴した。この御精神は、今上天皇に至る歴代天皇の変わらぬ御精神である事は山内健生先生の御講義で強く感じられ、脈々とその御精神が継承されている事に改めて感動した。

今回は三女神をお祀りする宗像大社を御参りした。神代より、「天皇を御護りする」という生き方が示されている。天皇の慈愛に感謝し神に倣い、また先人の生き方にも倣うために日々修養し、私自身も先人の精神を継承し、一つの「連続性」に連なる事が出来たならと思った。

山内健生先生の御講義を拝聴して

いにしへをいままで伝へし先人の見えざる心に思ひ到さむ

聖徳太子の教えを心の底から理解したい

(長崎大学　教　五年　柗本　仁)

宗像大社で楢の御神木に合掌して拝んでいた五歳の女の子の姿から、日本人が大切にしてきた「目に見えないものに対する畏の心」は継承されているように実感しました。神様を心の底から信じて合掌する女の子の姿を見ることで、「日本文化とは何か」深く考えることが出来た。また、聖徳太子の十七条憲法に触れ、文章の意味を理解するだけではなく、太子の教えが本当に大切なことだと心の底から理解したいと思いました。中でも、「憍は悪の中の極」という言葉が心に残りました。これからも何度も十七条憲法にぶつかっていき、日本人として自分や国民がどうあるべきか示せるようになりたいです。

身畏む聖徳太子の精神を学び心解し広めゆかなむ

自らの成長を感じた合宿教室

(早稲田大学　教　二年　嶋田裕一)

今年の合宿は昨年までとは異なった合宿となった。まず、班別研修でまともに議論ができた。今年で三回目になるが、今までは感想を述べるだけで班員との議論の相手になることが全く出来なかった。その悔しさを胸に、考えて言葉にする力が身についてきたのだと思う。次に、短歌については、昨年の合宿以来、澤部壽孫先生の短歌の会に四、五回参加させて頂いたことで、納得いく短歌を詠むことが出来た。また、屋外研修では最近世界遺産に登録されたばかりで、日本海海戦で日本が大勝利をおさめたことにも縁ある宗像大社を参拝することができて嬉しかった。

一年の年月を経し再会に「うれし」の一言それに尽きたり

短歌は思いのままに詠めばいい

(宮崎大学　環境ロボティクス　三年　石本篤史)

僕が合宿に参加した理由は短歌について学びを深めたかったからです。僕は短歌について学びたいと言ったものの、あまり短歌を詠むことが好きではなく、苦手に思っていました。しかし、二日目の池松伸典先生のご講義を受けて、短歌は思ったままに詠めばいいのだなと感じました。特に、講義冒頭の佐野宜志さんの三首は衝撃で、日常の中でこんな風に短歌を詠むことが出来るのだなと感じました。お陰で一首ですが、素直な気持ちを短歌に詠むことが出来ました。しかし、三日目の今村武人先生の短歌全体批評で指摘をいただき、自分の気持ちが短歌に乗せきれていなかったのだなと感じました。その後、班別相互批評で班のみんなに様々な意見をもらい、自分の納得のいく一首になりました。これからも、もっといろんな人達と短歌を詠み合えたらいいなと思いました。

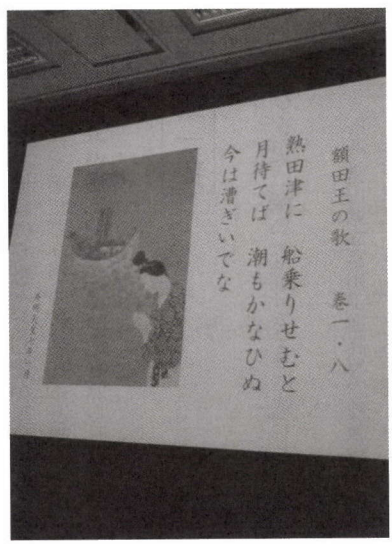
三日間思ひ一つに学び合ひ日本人と胸を張りたし

同じものを持つ同胞を見つけた

（横浜国立大学　理工　二年　渡辺幹成）

合宿前、私と同じような考えを持つおもしろい人がいればいいなと思っていました。私は表面的には柔らかいけれど、自分の中にはしっかりとしたものがあると思っています。それと同じようなものを心に立てている人には、なかなか出会えません。しかし、この合宿で、今生きている人ではないけれど、そういう人、いわば同胞を見つけた気がします。

カメラ・レポート5



古典講義「国の目覚めと万葉集」。プロジェクターにて美しい視覚資料を取り入れ（右）、小柳左門氏（左）は万葉集の名歌を偲んでいった。「国の宝である記紀万葉が遺されたのは、国の命に目覚めた先人のお蔭であった」と結んだ。

班別行動は短い期間で班員をより知る上でよいと思いましたが、もっと他の班の学生や社会人の方々と話しが出来たら良かったです。

今回の学びを心の中にしまっておくのはもったいないので、日本を学んで表に出す術を身につけたい。短歌を作る練習もしたいと思います。恋の歌も詠めればなお良いです。

縁ありてさわやかセンターに集まりし友と過ごせし時ぞをかしき

班友と意見を出し合うことで理解が深まった

（福岡大学　経　一年　宮本　浩）

私はこの学生青年合宿教室に初めて参加させて頂きました。振り返ってみると、この三日間で様々な体験をさせてもらいました。先生方のご講義はどれもすばらしく心に残るものでした。そのため、講義後の班別研修と短歌創作が私にとって重要な時間でした。意見を出し合うことで親睦を深めることができたり、班友や班付の先生方の助言のお陰で、より良い短歌を作り上げることができたと思います。班友と協力して理解を深めていくことで充実した三日間となりました。

高宮斎場へ参る折に
しきりなく蝉の声にも囲まれて過ぎゆく時の惜しまるるかな

日本人探しをせよ

（元　福岡県立直方高等学校教諭　小野吉宣　70歳）

今年も盆休みがあはただしく過ぎる中、厳粛にしかも学び多き合宿教室が運営委員や指揮班の方々、講義に登壇された講師の方々の心をこめたご活躍のお陰で終了に至ることができた。厚く心よりお礼を申し上げたい。理事長が「自分探し」なんか止めよと言はれた。歴史上のすばらしい日本人に光を当て「日本人探しをせよ」と。自信を持って日本人探しをして行きたい。浩然の力が湧く合宿であった。深く感謝している。運営委員長の「日本の心にふれる体験」がそれぞれにあったすばらしい合宿教室でした。

合宿で背すじ伸びけり悠々と心豊かに道ひらかなむ
先達の尊き言葉たどりつつ若き友らと学び合ひけり
胸内の鏡みがかれ明らかに前途を照らし進みゆかなむ

女子第一班

学びを更に深めて行けさうに感じる

（元　富山県立富山工業高等学校教諭　岸本　弘　72歳）

久しぶりに学生班、それも女子班といふことで緊張しました。今、合宿が終るに当り、皆さんのご協力を得て何とか責任を果せたかなと思ってゐます。一つは、心を開いて語り合

ひ、何か一つでも大切だと思ったことを持ち帰っていただくこと。一つは、今後メールなどで、連絡を取り合ひ、合宿での学びを更に深めて行けさうに感じること。

以上

ありがたうございました。

友みなと心うちとけ時をりに笑ひも起り楽しかりけり

代々ひき継がれる志の努力に頭が下がります

（野々村　悦子）

三年前出光美術館で「宗像大社」展が開催されました。その時大社に詣でたいと思いました。この四月より「短歌の会」に御縁をいただき、さらに宗像大社にまで参拝することが出来ましたこと感謝申し上げます。

この合宿で小柳左門先生の万葉集の歌をスライドと共に学びました。あの御本は、私は持っておりますので、帰りましたらゆっくりと小柳陽太郎先生の解説と共に、万葉人になり、本の中で旅をしたく思っております。

若き人々が日本の国柄を学び、次代の日本を築いていかれるのにすばらしい指導者の下でこの合宿が六十二回目であることに代々ひき継がれる志の努力に頭が下がります。

三日間有難うございました。

短歌の会にては面穏やかにいますとも司会となれば面の険しき

カメラ・レポート6

朝の集ひ。朝の清々しい空気を胸一杯に吸ひながら体操を行った。

萬葉集、宗像大社に感動した

（一社）福岡中小企業経営者協会　福元晶子）

三年連続してこの合宿に参加できたことに感謝したい。学校教育や普段の生活で触れる機会のない歴史と歴史観を学ぶことができる貴重な時間だからだ。今回も先生方から素晴らしい講義を聞くことができた。特に印象に残っている講義、研修は二つある。一つは小柳左門先生の「国の目覚めと萬葉集」。何となく遠ざけてしまっていた萬葉集について、中でも特に有名な歌、素晴らしい歌を数多くご紹介下さり、私に少し近付けて下さった。投映された美しい写真も興味を引きつけるに十分なものであった。二つめは、宗像大社の散策。以前一度訪れたことはあったが、今回は初めて公式参拝をさせていただき、また初めて高宮祭場を参らせていただいた。高宮は社さえない神聖な地であり、今でもその地を祭り、守っていることに感動した。

小柳左門先生の講義を聞きて（八月十一日）

いにしへに生きたる人の詠み給ふ歌楽し気に語り給へり
美しき写し絵とともに詠む歌は我をいにしへの景色に導く

「ありのままの心を詠む」

（長崎大学　教　三年　桑原由夏）

今回の合宿で、今まで伝わってきた歴史も、無意識的な人間関係も、それを大事だと思って、信じて、伝えてきたたくさんの先人の方々がおられるということを実感しました。そしてそれを後世に伝えていくべきは自分たちなのだと強く思いました。「伝える」というのは簡単なことではありません。でも、それを怠ったら終わりなのだという危機感をより大きく感じました。

今年度から、長崎大学でのサークルで、私が中心となり和歌の会を月一回で行っています。まだ二回しか実施していませんが、それもきっかけで一年生二人も今回の合宿への参加をしてくれました。他のサークル員も、和歌のすばらしさを大いに感じてくれています。これから、昔から変わらない「ありのままの心を詠む」ことを再認識してやっていこうと思いました。

日の本の未来担ふは我らだと感ずれば背筋の伸びる思ひす
先人の守れる歴史は日本人の真の心を現しにけり

しっかり考え行動してゆきたい

（長崎大学　教　二年　岡　美希）

今回の合宿で聖徳太子について、和歌について、また国柄について学ぶ中で私は改めて日本人でよかったと思いました。私もひとりの日本人としてどうあるべきか改めて考えました。まずは「日本」について自分が正しく知ることではないかと感じます。そしてそれを広めていくことが大切なのではない

かと思います。正直大学で知り合った友達と憲法についてどう思うか、日本のこれからについてどう考えるか等を話すことは少しためらいがあります。しかし本当に日本のことを思えばいよいよ行動に移していかなければならないと思います。長崎に帰り自分のやるべきことは一体何なのかしっかり考え行動していきたいと思います。簡単なことではないことは十分理解しています。だからこそ心を定めるために和歌を詠みたいと思います。

日本人として如何に生きるか聖徳太子の言葉を学び求めゆきたし

参加してよかった

（西南学院大学　法　二年　江崎文重）

現在大学生にインターンを提供する団体に所属しています。学生と社会の橋渡しという政治的には中立で、「世の中のどの職業にもカテゴライズされない国民の夢を背負ってくれる存在」としての「議員」の事務所に大学生を送り、社会経験を積ませ、「JAPAN PRODUCER の創出、若年投票率の向上」の二つを理念とする何とも曖昧な学生団体です。せっかく国の大事なはたらきをする議員と学生をむすびつけ信頼関係を構築させようとするのに、そこに「中立」といって安全を図り自分で考えることを放棄し独立した心を持てない学生がいることに危機感を、また「未来国会」という三十年後の日本

カメラ・レポート7

朝の集ひ。体操の後、本会会員による文部省（現文科省）唱歌の紹介、説明の後、斉唱した。

の政策を考えさせるコンテストでも出て来るのは先進技術などに目を向けたものばかりで、これで国家といえるのだろうかとの違和感を私は持っていました。この合宿は、それらを考へる上での筋道を示してくれるものでした。参加してよかったと思います。

班別研修によって救われました

（中村学園大学　流通科学　二年　新井絵梨果）

講義は私にとって大変難しく、講義の時間だけでは理解を深めるどころか、先生方のお言葉を聞きつつ、配布された資料を目で追うだけで精一杯でした。開始わずか二時間足らずで私の心は折れかけました。しかし、その直後の班別研修によって、救われました。班の他の皆さんの様々な意見には、皆さんの持つ沢山の知識が含まれ、講義の内容を他の方の意見を通して理解することができたからです。その上、班の皆さんは知識の浅い、無知な私の声にさえ温かいまなざしで耳を傾けて下さり、それがどれ程私の心を救って下さったか、言葉にしきれません。この合宿で学ばせて頂いたことを胸に、これから、日本のために私ができることをしていこうと思います。

住む所歳に意見に違ひあれ日本を思ふ心等しき
我の声知識浅くも素直なりと耳を傾く人に救はれ
古への歴史を残す福岡に日本を思ふ防人集ふ

目に見えない何かに守られて来たからこその今

（太成殿本宮　高見澤　玉江）

講義の中では、聖徳太子の偉大さに気付いたこと、山内健生先生のお話に繰り返し出て来た連続性という事が強く印象に残りました。班別研修でも出たのですが、日本が万葉の時代を共感できること、皇室が連綿と続いていること、当然の様に続いていると思っている事は稀有であり守り伝えられて来た努力があればこそ、そして目に見えない何かに守られて来たからこその今であると改めて実感しました。今回の様な合宿を通じて意識し直していく積み重ねが、少しずつどこかで繰り返していくことの大切さを、伝え続けることが大切ですが、自分も具体的に行わなければと反省する場ともなりました。

聖徳太子についての学びは、ようやく入り口に立ったところなので今回を機に深く学んでいきたいと思います。

万葉の歌人と照らし恋話（こひばな）に花咲く乙女らほほゑましかな
語らひておのもおのもの胸にある思ひことばに移し得るかな

女子第二班

班別研修で自分自身の姿勢が問ひ質された

（株）寺子屋モデル　西山八郎　64歳）

二泊三日の短くも充実した合宿でした。大事な課題を丁寧にお話しいただいたご講義。人生経験の相違を越えて語り合った班別研修、そして宗像大社への野外研修と振り返ると様々な場面が思ひ起こされます。中でも班での研修を通じて改めて課題に対する自分自身の姿勢が問ひ質される思ひがしました。

班員の思ひをうまく引き出すことができたか不安は残りますが、この合宿を契機として、これからも各人のテーマを掘り下げていって欲しいと願ってゐます。

朝の集ひで「海」を合唱す

作曲者の思ひ高まりて五段なる曲生まれしと説明のあり

高らかに声を合はせうたひゆけば緑の広場に響きわたるも

「日本全体が麻酔を打たされてゐる」

（（公財）郷学研修所　安岡正篤記念館　嶋田元子）

「日本全体が麻酔を打たされてゐる」といふ山内健生先生のお言葉で日本の現状の酷さが納得できました。と同時に開会式で今林賢郁理事長が述べられた「今はもう占領軍のために独立できなかったのではなく、日本人自身が独立しようという意志が無い為に国が揺らいでゐる」といふお言葉から、日常において自分が為すべき事を改めて問はれた思ひを強くしました。二回目の参加になる今回は、三名の学生たちから

カメラ・レポート8

講義。内海勝彦氏は、太子の御言葉「世間虚假唯佛是眞（せけんこけゆいぶつぜしん）」について、十二年前に亡くなった同学の友の短歌を紹介し、「世の中はむなしいと逃げるのではなく、そこにどっぷりと浸（つ）かりながらも真心を尽さうとされる積極的な意志が感じられる」と示した。

初々しい素朴な疑問を投げかけられ、固まり気味になってゐた自分の考へをも見直すきっかけを得られました。この合宿を広く伝へてより参加者が増えることを望みます。

来るたびに数多感動賜はりてこの催しの弥栄願ふ
若人の素直な心に動かされ己がつとめに励まむとぞ思ふ

短歌を日々よみ続けていきたい

（日本生命　野々村　美紀子）

二泊三日の合宿を終えて、今思えばあっという間の日々だった気がします。なかなか聞く機会のない講義内容や、自分の思ったことを回りに伝えるという班別研修はとても素晴らしい体験だったと思います。また、学生の方達の熱心な態度、日本人として何かを学びたいという気持ちに圧倒されました。この合宿で、日本人として、また人としての心の在り方を学べたように思います。できれば短歌を日々よみ続けられたらと考えております。日々の惰性に負けないように、この合宿で得られたなにかを少しでも活かして生きていきたいと思います。

朝の唱歌斉唱にて
朝霧に雄々しき調べこだまする光きらめく友らの姿

憲法十七條の第十条について思ったこと

（長崎大学　教　三年　代田瑞希）

自分は忿だらけで瞋を表に出しまくるところがあり、喧嘩になったり仲違いしてしまったことも多いが、それは自分にとってゆずれない大切なもの「いつまでも優しい友人と友でありつづけたい」というものがあったからであり、だからこそ、忿を絶ち瞋を棄て、相手が怒っていても自分をかえりみなければならないのだと思った。聖徳太子は、どんな思いでこの憲法を書き上げたのか、ずっと分からなかった。なぜ悲しみも怒りも憎しみも抱いていたであろうにと。太子は、自分の胸の奥にある「和」という願いを見つめ続けるためにこの十条を書いたのかなと思った。この考えを持つことができたのが今回の合宿の一番の出来事だった。

聖王の願ひ見つめし和の心自分の心にあると信ぜむ

もっと日本のことを勉強したい

（長崎大学　教　一年　小坂　萌）

今回初めて合宿に参加し、自分の知識のなさ、思考の浅さを痛感すると同時に、もっと聖徳太子のこと、和歌のこと、そして日本のことを勉強したいと強く思いました。講義はとても良くて感動し心動かされることも何度もありましたが、私には難しく意見を求められても何も言えないことがしばしばありました。しかし、班の方々の意見や考えを聞く中で講義の中で言われたかったことを発見することが多くとてもお

もしろかったです。また、世代の違う方の考えを聞けたことは新鮮でした。聖徳太子や憲法や日本のことを考えなくても生きてはいけるけれども、「日本人として」生きていくことはできないのだと思いました。

先人に生き方学びこれからの人生よりよく生きてゆきたし

当たり前のことを考え直すきっかけとなった

（中村学園大学　教　一年　下道夏芽）

今回が初めての合宿参加で、どのような講義があるのか討論で何を言えばいいのかばかり考えていましたが、班では未熟な私の意見をしっかり聞いて頂けて本当に充実した時間となりました。二日目の宗像大社の参拝では、初めて本殿の中に入り神をより身近かに感じ本合宿での最も印象深い体験となりました。

本合宿全体を通して、普段意識しない「自分が日本人であること」や「日本の良さ」について深く考えました。私たちが当たり前と理解していたことを考え直すことで、より日本への深い理解が得られたと思います。また機会があればぜひ参加させて頂きたいです。

別れの日姿見へねど思ひ出は消えることなく涙に映る

カメラ・レポート9

短歌導入講義。池松伸典氏は、短歌は自分の思ひを素直に言葉に表現することが基本である、率直に詠まれた歌は表現の巧拙は別として他者に伝はる、とし、心に素直に響いてくる歌の数々を紹介するとともに、短歌の作り方の基本を示していった。

短い日程も工夫されたスケジュール

（天本和馬　67歳）

短い日程の中で工夫されたスケジュールを組んで頂き全体的に良い流れの中で合宿が営まれたと思ひます。講義では、内部講師のみの登壇でしたが各講師ともよく準備された内容と感じました。班別研修では、各参加者は合宿に取り組む準備が出来ており、合宿初日よりスムーズに入れました。宗像大社への研修は、レクレーションではなく文字通りの研修で内容も申し分なく感動しました。

班別研修

若きらに混じりて同じ文読めば学生時代の思ひ浮び来
なつかしの友と会ひて
なつかしと言葉交せばたちまちに昔の手ぶり思ひ浮び来
さはあれど我より深く学び来し友の姿は尊く思ほゆ
我も又思ひひとつにすすみたし友の姿を遠くに見つつ

社会人第一班

中身の濃い合宿だった

（熊本県立熊本高等学校　久保田　真　51歳）

二泊三日は、以前からすると随分短かくなりましたが、中身の濃い合宿だったと思ひます。どの御講義も大変すばらしい内容で、大変な勉強をさせていただきました。

特に内海勝彦先輩の太子の御講義は、太子の御言葉をわかりやすく伝へていただき有難かったです。私も熊本で太子の御本を読んできましたが、あのやうには深められてはをらず、少しでも深められるやうにしたいと思ひました。

今林賢郁理事長は開、閉会式共に、国の独立、個人の独立が大切と言はれました。昨年の東日本合宿の導入講義で、伊藤哲朗先生が、そのためには「自分の意見を、そこから逃げられるやうにあいまいにしてゐないか」と言はれました。意識して過ごしたいと思ひます。

内海勝彦先輩の御講義を聞きて

昨晩は横になりても一睡もできずじまひと語りたまひき
語義とるも味はふことも難からむ太子伝ふることに悩みぬ
日頃より太子を読みて来ますらむ太子の言葉をたどり語らる

新鮮であった

（(株)ちゅピＣＯＭふれあい　北川文雄　69歳）

数十年振りに参加した。班別研修も短歌班別相互批評も、常日頃真剣に生き方とか日本の国に関して話す機会がないので新鮮であった。

短歌創作も苦しみながらも楽しめた。精神を統一し言葉を選び、自分の思いを三十一文字に集中する心地よい緊張感で

あった。
残り少ない人生をどのように生きるか考えてみたい。
貴重な機会を与えて頂きありがとうございました。

全体感想自由発表を聞きて

若きらの発言を聞く折々に五十年昔の姿甦り来る
学園の紛争ありし時なれば熱き言葉のあまた往き来す

暖かく受け入れていただいた

（元 マツダ(株) 久々宮 章 68歳）

四十数年振りに社会人班の一員として参加しました。参加するうちに当初いだいていた不安が次第に薄れていくのを感じました。班の皆様や運営の方々、友人、先輩の皆様に暖かく受け入れていただいたことに心より感謝致します。

万葉集や古事記などの古典の魅力をあらためて実感することができました。又、短歌を詠み相互に批評しあうことで切磋琢磨することの喜びも思い出すことができました。ありがとうございました。

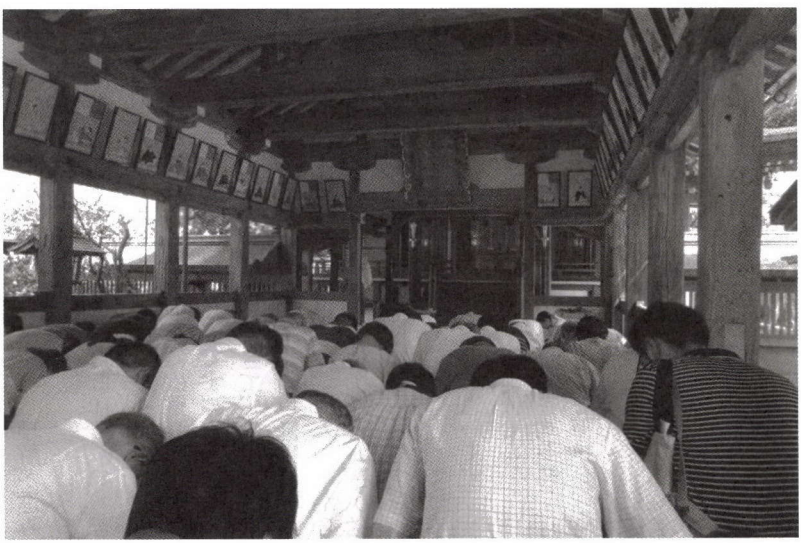
若き日に共に学びしみ友らの導きうれしくありがたきかな

とても勉強になりました

（元 大村郵便局 橋本公明 62歳）

今回の合宿は四十年ぶりで、久々宮章先輩、川井泰彦先輩

カメラ・レポート10



野外研修（宗像大社参拝と短歌創作）。昇殿参拝。

と、聖徳太子の、「聲は以て意を傳へ、書は以て聲を傳ふ」の所を一緒に輪読し、学ばせて頂き、とても嬉しく思ひました。黒上正一郎先生はどういふ読み方をされたのかを偲んでゆくところが、とても勉強になりました。どうも有難うございました。

先輩と学生時にもどりしか太子の文に触れし時かな

2回目の参加で少しは慣れてきました

（門司印刷（株）　江島和男　59歳）

今回の合宿は、昨年に引き続き2回目の参加でした。昨年は長男と参加できましたが、都合が付かず、私だけの参加となりました。昨年は初めての参加で、分からないまま3日終わりました。今回は昨年と同じ会場で、同じ形式で少しは慣れてきました。

小林秀雄さんのお話は、難しく私にはさっぱり分かりませんでした。高校時代、大学受験で分からないまま読んでいた事を思い出しました。

宗像大社参拝は、以前は父に連れられ、車を買い替えるたびに、お払いを受けてきただけで、高宮に参拝する事もありませんでした。地元門司港が出光佐三さんの創業の地で出光佐三美術館を置いていただいている縁で、勉強させて頂いております。おとどしから、出光佐三さんが崇拝された宗像大社の参拝を2度ほどしており、理解は深まっていましたが、宮司さんの熱心なご案内のお陰で深く理解が進みました。感謝申し上げます。

班別研修では、若い人が二人おられたので、若い人の考えが少しは分かってきました。

今年の講義はどれも理系の私には難しく、消化不良で終わってしまいました。復習が必要です。

私も自虐史観で教育を受けてきて、中学・高校と日本史は大好きだったにも拘らず、明治維新以降はまともに授業もなく、分からない時代でしたが、大学に入ってから、大東亜戦争史や司馬遼太郎を読むようになり、何か違うと思っていたところ、30歳を過ぎた頃、中村功さんとの出逢いがあり、早い時期に知ることが出来ました。私にとっては幸いでした。国民全体が早く真実を知れば良いと思います。

香椎浜老若男女相集ひ国の行く末語り合ふ
西の伊勢宗像大社拝殿で日本を思ふ正式参拝
せみ時雨高宮の森三女神割符にこめて平和を祈る

国文研の聖地に赴くやうな気持ちがありました

（茨城新聞社　佐川友一　52歳）

九州出身の国文研諸先輩方は多く、今回合宿に参加するに当たっては、国文研の聖地に赴くやうな気持ちがありました。名だたる宗像大社を訪ねる機会も頂き有難く思ってをります。

今林賢郁理事長が開会の辞の中で言はれた国の独立につい

ての鋭い指摘に目を覚まされ、まさにその通りと思ひました。

各先生方の御講義も中身の濃いもので、圧倒されました。中でも内海勝彦先生の御講義が、着実なお話し振りとともに印象に残りました。「維摩経義疏」の「大悲息むことなく志益物を存す」の箇所で、「國家の事業を煩と爲す」の意味について「この人生の闇黒と悲哀にめざめ」「蒼生の罪苦を自らのそれとし」「永久苦闘の生に没入せられた」といふ黒上正一郎先生の解釈に、心を揺さぶられました。

福岡の地に集りて語り合ひ我が生き方を踏み固め得し

祖国の文化を見つめ直す良い機会になった

（学校法人　中村学園　原野敦志　34歳）

今回の会は改めて祖国の文化を見つめ直す良い機会になったと思います。小柳左門先生の講義で海外との交渉を通じて、危機感を感じ、日本国としての目覚めを経験したとありましたが、現代でも同じ事が言えると思います。現在まで日本が守ってきたものは何なのかを知る為にも先人達が残した言葉、詩を学び、日本の国柄というものを自分なりに言葉にできるようにしたいと思います。

世界にも類なき国家日本を学びて守る未来永劫

カメラ・レポート11

野外研修（宗像大社参拝と短歌創作）。高宮祭場。天照大御神の御子神の三柱の女神の降った「降臨の地」と伝へられる所で、神籬（神霊の憑依する樹木）を依代とし、社殿が建てられる以前の古い祭祀（庭上祭祀）を継承する全国でも稀な祈りの場である。神話に連なる祭場は生ひ茂る木々に囲まれて、木漏れ日の中に聖なる佇まひを見せてゐた。

日本という国の魅力について、はじめて理解をする事ができた

（一社）福岡中小企業経営者協会　西本　涼　24歳）

今回の合宿研修では多くのものや事を見聞きし、いかに自分が無知であり、感動する事に対し疎いかという事を知り、今後の生き方に影響を与える研修になったと思います。

勉学やディスカッションの本質については、相手に知識を見せたり、打ち負かす事ではなく、より物事の本質を理解し、他人との相互理解を深める目的がある事がわかり、大和言葉や（和歌）短歌を味わう事により、日本という国の魅力について、はじめて理解をする事ができたと思います。

今後の人生では万葉集、古事記をたしなむ事を目標に据え日本の歴史や言葉の素晴しさを自分で吸収し、他人へと伝えていく事に取り組んでまいりたいと存じます。

万葉集学びて知りたる先人の言葉に心動かされけり

御苦労様でした、有難う御座いました

（社会医療法人 原土井病院　小柳左門　69歳）

・此度は、万葉集の心について、講義を担当させて頂き、まことに有難う御座いました。スライドを使った講義で解り易く、印象深くを考えて用意致しました。これを契機に、御検討願えればと存じます。

・参加者が少く、残念でしたが、これから、国文研として何を目指していくのか、深く考える時です。

・少い参加者でしたが、班別討論は意義深いものでした。

・二泊三日は止むを得ないとは言へ、もっと深めたい気持ちが残り、やはり寂しく感じたのも事実です。

・運営委員始め合宿準備、運営に携って頂いた方々に、心より御苦労様でした、有難う御座いましたと、お伝えしたいと存じます。

朝明けて香椎の浜に集ひたる友らと歌ふ元寇の歌

日の本の国護らむとものふの戦ひし跡ぞここの海辺は

身を捨てて国を護りしつはものの魂残るらむ香椎浜辺は

危ふかる国の様なれど若きらの心信じて国を護らむ

社会人第二班

神代の時代に触れることができた

（㈱ オートバックスセブン　小田村　初男　67歳）

今回の合宿教室は二泊三日と、これまでに比べ短い日程であったが、コンパクトな中にも、よく考えられた構成となっており、まことに有意義であったと思います。

特に宗像大社に参拝した屋外研修に於て、古き神代の時代に触れることができ、古代の人たちが外国との交流の道であ

る海路の安全の為、真摯に神に祈った様子をうかがうことができ、また国難に際して如何に神に祈り且つ困難に立ち向かったかを感ずることができました。

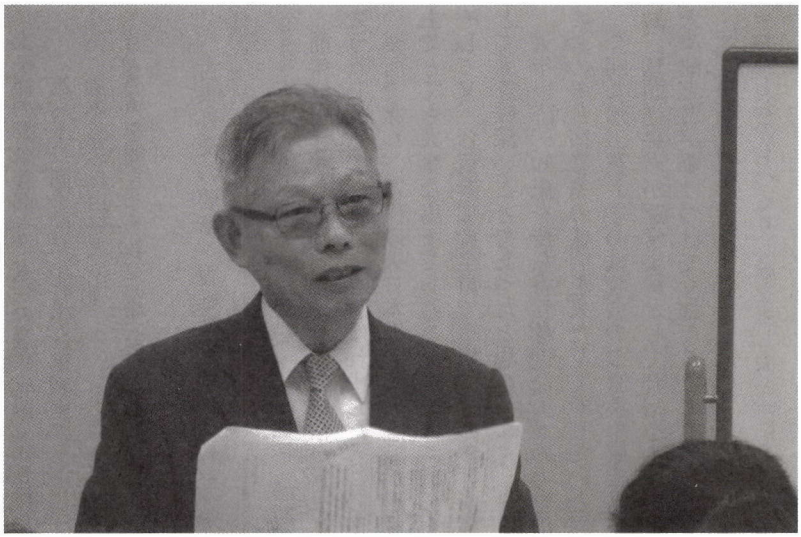
古へゆ引き継がれたる国柄を皆で学びつ継ぎてぞ行かむ

たいへん勉強になりました

（熊本市役所　嘱託　末次直人　63歳）

今年も、先生方や班員、会員皆様方の肉声をお聞きすることができたいへん勉強になりました。以下、心に残ったことを記します。飯島隆史先生の話より、「科学ではわからない 真の学問がある」、「どういう生き方が幸せなのか」、自分の心の満足、人との付き合いを考えると、真の学問がある、その通りと思いました。そして、この合宿を通して、これが「短歌」ではないかと思い始めました。小柳左門先生の話より、「歌は意味ではない、調べ。言葉の響き。万葉集には清らかで明るい古代精神が現れている」の言葉が、心に残りました。内海勝彦先生の話より、今迄、「悲能く苦を抜く」この言葉の具体性がわかりませんでしたが今上天皇、皇后両陛下のペリリュー島慰霊で、遺族の方々に慰めの言葉をかけられ長年の苦労を癒やされたと話され、こういう事なのかと気がつかされました。山内健生先生の話より、国語、歴史、伊勢神宮（神宮の森や社殿が醸し出す清らかさ）、連綿と繋がっている事柄を次々と力強く教えてくださり、すばらしい日本の国柄を改

カメラ・レポート12



講義。山内健生氏は、今上陛下が、民を「大御宝（おほみたから）」とされた初代・神武天皇を追慕されて毎年四月三日に神武天皇祭を厳修されるとともに、歴代天皇の例祭を厳修されるところに、連綿たる「大御心」の連続といふ「国柄」がある事を指摘した。

めて気づかせていただき、私も伝えていこうと思いました。

合宿地にて

夏の朝散歩に出づれば涼しかり浜風ならむここ香椎浜

真夏日の芝生広がるグランドは人影もなく静かなりけり

御講義に慰霊の心を感じた

（折尾愛真短期大学　松田　隆　61歳）

今年も昨年に引き続き参加できましたことを嬉しく思っております。

今回の合宿は全員で九十名を切るとのことで、人数に関しては寂しいものがありましたが、内容については十分であったかと感じました。

特に、内海勝彦先生の「聖徳太子の言葉に触れて」の御講義では、大東亜戦争で散華された人々のことにも触れられ、「ここに慰霊祭有り」と感じた次第です。

来年の合宿は八月の終わり頃から九月にかけて予定しているとのことですが、来年も参加できることを自ら祈っております。

事務局の皆様、どうも有難うございました。今回の合宿の成果を早速、勤務先の短大の学生達へ生かして行きたいと思いました。

内海勝彦先生「聖徳太子の言葉に触れて」の御講義を受けて

太子様の御講義聞きて人生の意味有難く知り得たるかな

第六十二回全国学生青年合宿教室の

全体感想自由発表にて

若人の声を聞きつつ教室の使命を感じてうれしかりける

古来外交の要所、香椎浜での合宿教室

（日章工業（株）　藤新成信　57歳）

前年に引き続き福岡、香椎浜にて合宿が営まれた事は、大変うれしく意義あることと思はれました。この地は古来外交の要所であり、古代以来日本人の国家意識が形成されていく上でとても大事な場所であることが改めて感じられました。そして又、合宿参加者全員で宗像大社の参拝ができた事は、とても意味深いことであったと思ひます。

来年以降、知恵を持ち寄り身近な人々の力を借りて東西おのおのの合宿教室の盛会を果たして参りたいと思ひます。

今回九州工業大学の輪読会のＯＢ桑木康宏君、高橋俊太郎君、鷲頭祥平君が運営委員として合宿を支へて下さり、また大津健志君が駆けつけてくれたことに感謝します。

短歌班別相互批評

おのもおのもつくりし歌を直し会ふ時に心はなぐさまれけり

再確認と開眼の連続でした

（合同会社瑞穂恒産　河崎　由紀夫　56歳）

五度目となった今回の合宿は、再確認と開眼の連続でした。合宿に関られた全ての方に感謝申し上げます。以下の歌稿をもって感想といたします。

「学問と人生」を受講して

古（いにしへ）の書（ふみ）を読みたし学びたしおのが心を虚しくしつつ

「国の目覚めと萬葉集」を受講して

詠み人と心通ふは醍醐味ぞ我と彼との境なくして

短歌創作に際して

折々におのが心に感じたることをすなほに詠むは楽しき

宗像大社に参拝して

国宝の刀と鏡勾玉を見れば浮かびぬ古事記の情景（けしき）

蝉鳴きて涼しき風の吹き過ぐる杜（もり）をめぐりぬ友らとともに

高宮に社（やしろ）はなけれどその奥に神籬（ひもろぎ）祀りてかしこくありぬ

講義の感銘を今後の糧に、また子らへ伝えたい

（一社）福岡中小企業経営者協会　西田　博　42歳）

今林賢郁理事長より、「自分の目で見て、心で感じて、頭で考える」ことを行動に起こし、積み上げ、継続していくことが他国から信頼され自律を生んでいくとのお話があった。これは日本国としてもそうだが、一人の人間として大切なことだと心に留め今後努めていきたいと思いました。

本居宣長「うひ山ふみ」に感銘を受けました。学問の方法

カメラ・レポート13

講義に真剣に聞き入る参加者。

にこだわる必要なく継続して励み続けることの大切さ。凡人でも努力して学べば功である。年齢は関係ないということに私自身反省し、今からたゆまず努力していきたいと考えております。

古事記、万葉集、日本書紀などの数千年前の古典が現代も読めて、活用され長い間引き継がれてきたことは大変ありがたいこととつくづく感じました。

聖徳太子の御講義では、これまでの自分を省みることができ、今後の自分のあり様、生き様のヒントをいただけたと考えております。

最後に、今回受けた講義を、先ずは自分の子供達にも伝え、当然自分自身も学問から考えを持ち行動する様に努めて参ります。

国文研合宿を受講して（八月十三日）

いにしへの文をみたるは自らを振りかへらせる貴重な時よ

日本の現状に危機感

（FOインターナショナル　西野裕史　27歳）

今回の合宿は三回目になります。今回の参加のきっかけは、仕事が手につかないくらい、日本の現状に危機感を持ったからです。

来日外国人の問題、特に文化摩擦の問題。

他人が困っているのに、見て見ぬ振りをする問題。

それらの対策が、十分でないと感じていること。などです。

この合宿で学んだことを、少しでも周囲に伝えていきたいと思っております。

来年も参加したいと考えておりますので、よろしくお願いします。

宗像大社参拝にて

み社の手水を使ひ正式に参拝するもの珍しき

古事記萬葉集の背景に

白村江の敗戦と国を守る心

（寺子屋石塾主宰　岩越豊雄　72歳）

小柳左門氏の「国の自覚と萬葉集」の講義で古事記萬葉など日本の古典の精神の背景に、百済からの要請を受け敗戦した白村江の戦があったことを初めて知った。額田王の歌、柿本人麻呂の歌もただすばらしいと読んでゐたが、その背景には国を守るために行き来する船団の歌であると知り、その心情の奥を知ることができた。大伴家持が編纂した防人の歌、あの父母を思ひ、恋人を思ふ純真な心、大君の命かしこむといふ雄々しい心も、敗戦後の国を守る心が込められてゐることを知った。その国防の最前線の舞台が宗像大社であり、皆で見学し学べたことをうれしく思った。その宗像大社の三神が、伊勢神宮に祭られる天照大神との繋がりもあり、宗像は

皇室との深い繋がりもあることを知った。山内健生氏の講義にあった、万世一系のすばらしい国柄を守るためにも、この国の文化、国防につながる古事記、萬葉を学び、子供達に伝へなければと思った。

宗像のこの地は国を守りたる万葉の心とつながりといふ
韓国に対せし大社は天皇（すめらぎ）の国を守りしゆかりの地と知る
わが母の生まれ育ちし福岡で父しのびつつ研修を受く

国民文化研究会

引きつづき合宿は続けていかねばならない

（昭和音楽大学名誉教授　國武忠彦　79歳）

飯島隆史さんが小林秀雄の一番むつかしい問題に挑戦してくれた。学生がどれだけ理解してくれたかは分からないが。小柳左門さんが万葉集の良い歌を紹介しながら国難に立ち向かった天皇から庶民までの心をよみがえらせてくれた。内海勝彦さん、太子の言葉を日常の経験・実感に基づかれてわかりやすく話して下さった。池松伸典さん、短歌の導入、歯切れよく、要領よく体験的に話をしてくださった。学生にはスーと分かりやすかったと思う。山内健生さん、日本の国柄について。私たちの日常生活のなかに国柄があることを具体的にいくつも例を出していただき、日本に生まれて気づかなか

カメラ・レポート14

創作短歌全体批評。今村武人氏は、相互批評の際は、作者がどういふ思ひで歌を詠んだのか、歌を作ったときの感動や心情などをよく聞き、一緒になって最もふさはしい表現を考へ、適切な言葉に直してゆくやう心掛けてほしい、と説いた。

った、大事な伝統というものに目を向けさせていただきました。今村武人さん、歌の批評、大変な仕事をよくやってくださいました。殆んど寝らずに取り組まれたのではないかと思います。

最後に申すまでもなく、事務局、運営委員長（武澤陽介さん）、指揮班の方々には厚く御礼を申し上げます。参加者は少なかったとは思います。引きつづき合宿は続けていかねばならないと思いましたし続けていけるのではないかと自信をもちました。

先人の恩恵

（元 拓殖大学　日本文化研究所　客員教授　山内健生　72歳）

あらため考へさせられ、学ばせられた合宿であった。これほど先人の恩恵に浴してゐる国でありながら、それを度外視した教育がなされてゐる。恵れてゐるが故に、その価値がわからず足許を見定めることなく、漠然と浮いた感じである。財産家の息子が、自分の置かれてゐる状況がわからず、親の財産を喰ひ潰してゐる感じである。

親の財産には限度があるはずで、その有難味を実感するにはどうしたらいいのか。

歴史との連続性をわからなくしてゐる「日本国憲法」をどうするのか。国防は物理力ではなくそれを内から支える文化力、精神力がなければ意味をなさない。第九条の是非のレベルにとどまらない憲法見直しが不可欠とあらためて実感させられた。

新横浜から合宿地を目指す
博多まで五時間かからず到着するわが新幹線の速さに驚く
あらためてわが日の本の鉄道の技術の高さに誇りを覚ゆ
わが国の技術の粋を盗みたるチャイナのふるまひ腹立たしきかな

今村武人兄の創作短歌全体批評を聞きて
表現によしあしあれど歌よみし人の心のあらはれなると
班別での批評の折の心得をまごころこめて説きたまふなり
歌をよむみ暮しのさまの自づから浮びくるなりみ言葉聞きて

閉会式
一同で唱ふ君が代高らかに響きわたりて講義室に満つ

人々の思ひの積み重ね

（株）ＩＨＩエアロスペース　内海勝彦　62歳）

この合宿を通して、改めて日本の文化を継承し、拡めることの大切さを知った。

沖ツ島の掟が今も固く守られてゐるのは、継続してきた人々の意志があったからである。同じ様に、太子の思ひは黒上正一郎先生の『ご本』をしるべとして我々に伝はってきた。いづれも、大切に思ひ、次の世に相続せんと思はれた人々の思ひの積み重ねであったことを感ぜしめられた合宿であった。

合宿講義を終へて

いかにして聖王の御書伝へんと思ひ続けしひと年近く
拙けど語りてゆけば若きらの聞き入る姿の有難きかな
難しきみ文を班員らとひたぶるに取り組みにしと聞けば嬉しも

和歌のすばらしさ

（若築建設（株）　池松伸典　61歳）

男子三班に入って研修を受けた。東京地区嶋田裕一君、渡辺幹成君どちらもいい男である。身近な話もできて親交が深まった。是非この契機を大事にしていきたい。

「短歌創作導入講義」をさせて頂き、時間と手間はかかったがいい勉強になった。改めて亡くなられた国文研の先生方の思ひが伝はってきた様に思ふ。福岡大学の宮本浩君も素直ないい男である。このともしびを盛り上げていきたい。

和歌のすばらしさを改めて感じさせられる合宿であった。

小柳左門先生の萬葉集のお話は、短歌の作者の思ひが映像を交へあざやかによみがへってくるものであった。

嶋田裕一君の若かりしころの話を聞きて

幼き日儒学の教へ母上にいやいやながらも覚えさせられしとふ
後々に母の教への己が身を助けてくれしと友は語れり

カメラ・レポート15

班別短歌相互批評。具体的に短歌に詠まれた作者の思ひに皆で心を寄せる中で、班員の心が一つに溶け合ってゆく。合宿教室中最も楽しい時間の一つである。心の籠る言葉の遣り取りの中で心が和み、思はず笑みがこぼれる。

日本人の生き方をこれからしっかり学びたい

（熊本県立第二高等学校教諭　今村武人　54歳）

私達は万葉集など古典を読むことができる、また私たちは同じ文語体を用ゐて短歌を作ることができる、など先人たちと一番身近にことばの交流ができるのも短歌だと思ひます。今回、小柳左門先生の御講義にもあった「国の目覚め」とは国防だけではなく日本の心を表現した「国語の目覚め」でもなくてはならないと思ひます。

領土や御皇室を一人の力だけで守ることは出来ませんが、国語を守ることは誰でも一人でもしかもすぐにできます。短歌をはじめとした多くの古典に親しみ日本とは何か、日本人の生き方とは何かを古代の人が古事記や万葉集を作り上げたやうに私もこれからしっかり学びたいと思ひ直した合宿となりました。

玄関受付にて澤部壽孫兄

「久しぶり」と我を笑顔で出迎ふる大人（うし）の心のありがたきかな

講義をばつとむる会場についに着きしだいに胸の高まり覚ゆ

今林賢郁理事長

独立して何を守るかお互ひに考へ深めよと示し給ひぬ

飯島隆史氏が小林秀雄のご講義のみを聴きて帰らうと思ってゐたときの小田村寅二郎理事長のみ言葉

合宿の趣旨分からねば小林氏も出講せずと語り給ひしと

小柳左門氏のご講義を拝聴して

古の人の姿も今もなほ言葉となりて生きてありなむ

外つ国と交はる中に「日本」を古人（いにしへびと）は覚めしといふ

ありありと己の思ひを歌にする古人の生き様を知る

朝のつどひ

さやかなる朝日をあびて師友らと共に体操するも楽しも

添削作業を終へて

夜なべして参加者の歌を読みゆけばいつしか空も明けそめにけり

指揮班

指揮班長を担当し色々勉強になりました

（㈱）ラック　高橋　俊太郎　39歳）

今年は指揮班長を担当させていただきました。

長年事務局などの裏方仕事を務めさせていただいてましたが指揮班長は初めてです。横で見ていたのと、実際に行うのとはかなり勝手が違い、色々と勉強になりました。不手際があり、参加者の皆様にご迷惑をおかけしたところは申し訳ありませんでした。

今年の合宿は事前の段階から参加させていただき、下見も

させていただいたので可能な範囲ではより良い準備ができたと思っています。

指揮班ですと講義後の班別研修でより深く理解していくことができませんが、各先生がたのお話は楽しく拝聴させていただきました。屋外研修への往路中では、事前のお願ひができていない中、小柳左門先生に宗像大社についてご講義頂いた事も記憶に残っています。

最後に武澤陽介運営委員長をはじめ、指揮班でご活躍いただいた森田仁士さん、鷲頭祥平さん、岡部智哉さんに感謝します。

最終日朝の集ひにて

体操の腕をふり上げ見あぐればうろこ雲が朝日に映える

気付いたこと

（豊司会 新門司病院　森田仁士　61歳）

1　2年ぶりの参加で、今回も記録を担当した。高橋俊太郎兄の堅実な準備で、問題なく業務を完了でき、兄に深謝します。合宿会場の講義室設備は良好。ただ1点、録音用端子が無く(故障か?)、ICレコーダーで「じか取り」したため、録音した講師の声が不鮮明になった点が残念でした。

2　指揮班でしたが、全講義を聴講でき幸甚でした。全講師熱のこもったお話でしたが、学生に対して〝もう少していねいな説明が必要では?〟そのためには〝少し量がよくばり過

カメラ・レポート16

合宿を顧みて。今林賢郁理事長は「開会式で、我が国の現状を見ると、一刻も早く国民一人一人が自立と独立の気概を取り戻さなければならないと述べたが、そのための糸口はこの二泊三日の合宿研修で掴んだのではないか。後はこれからの皆さん一人一人の心構へにかかってゐる」と示した。

ぎでは？〃と感じることがありました。

3　日程の2泊3日は、私個人的には、仕事の都合等がつけやすく助かりますが、〃学生に伝えるには3泊4日は必要ではないか？〃と感じております。

声合はせみ祖先の功伝へたる『元寇』歌ふ朝清々し

日本の歴史・文化伝統は脈々と続いている

（新日鉄住金ソリューションズ（株）　鷲頭祥平　31歳）

本合宿にてはじめて指揮班となり裏方として合宿を支えることとなった。以前までの班員としての合宿参加では思いもよらない所で、これまでの指揮班の方々が動いて下さっていたと思うと、今さらながらに、頭の下がる思いだ。また、班別研修はできなかったが、すべてのご講義に参加できたのは有難かった。おかげ様で、今回の合宿でも様々な学びがあった。短歌導入講義では、国文研会員の方の短歌が紹介され、その情景を見ているように思えてしまうほど生き生きしたものであった。またその後の短歌創作では、宗像大社の歴史・伝統を学ぶことができ、日本の歴史の連続性について深く考えさせられた。講義全体を通して、日本の歴史・文化伝統は脈々と続いていることにあらためて納得した。

古くより先人たちから伝え来て私につらなる日本史尊し

聴講することの難しさに気付かされた

（Ｈｕｂａｘ（株）　岡部智哉　24歳）

指揮班として合宿教室に参加しました。酷暑の中迅速な対応を心掛けて下さった参加者の方々に感謝申し上げます。

講義におきましては、聴講することの難しさに気付かされたかと思われます。講師の方々はテーマに沿った内容を偉人や文献を糸口にテーマを構築しお話下さっているかと思われますが、講義において取り上げられている文献資料の言葉そのものに蓄積された重みが、講師の方々が伝えんと欲する意図よりも先行してしまい、この意図の汲み取りを素直に行うことが出来ない。そんな場面に陥ってしまうことが幾度かありました。文献資料として掲載されている言葉と、お話下さる講師の方の伝えんと欲する意図との調和を、意識せずして行うことが出来る耳を感覚を養っていければと思う次第です。

運営本部

祖先と子孫もまた国民なのである

（上野学園高等学校　武澤陽介　37歳）

昨年の暮れに運営委員長をお引き受けして以来この合宿を、今一度日本の原点に立ち返り、祖国を見つめ直すものにしたいと心を砕く毎日だった。

力が及ばず、関係の方々に大きな心配やご迷惑をおかけし

全体感想自由発表。「聖徳太子の『憍(きょう)は悪の中の極』といふ言葉に触れて、自分の人生姿勢や人への思ひの在り方に気付かされた」「万葉集を味はふ講義を聞いて、額田王や防人の歌に情景が浮かんできて、心を動かされた」「日本の国柄に触れた講義を聞いて、歴代天皇が持たれてゐた大御心をもっと勉強したいと思った」「班別研修は、『相手を打ち負かすディベート』とは違ってゐた。人の言葉に真剣に耳を傾け、自らも心を開いて語らうと努める体験が新鮮だった」「短歌の相互批評では、自分が思ひを語り、他の班員がかうなんじゃないかと言ってくれて、歌ができていく感じが良かった」「国家の安全保障問題に重ね合はせて、自分たちの国に信を持つ。それには、どのやうな国で生きてゐるのかをよく知り、一人一人が日本人としての魂をよみがへらせていくことが大切だと思った」等々、参加者が次々に壇上に立ち、三日間の研修で感じた思ひを率直に述べた。

てしまったことが悔しいが、私なりに課題が見つかる良い機会となった。今後の改善点としてこの経験を大切にしていきたい。

どの先生方のご講義も、私には新鮮な感動に満ちたものであった。山内健生先生が紹介された、過去と未来、祖先と子孫もまた国民なのであるという柳田国男の言葉は、特に心に残った。

今後も更に、真の学びを求めて精進していきたい。

運営委員長を務めて

大切な務めに迷ふ我に手を差し伸べし友のありがたきかな

うちとけあふつき合ひ

（ＩＢＪＬ東芝リース（株）　小柳　志乃夫　61歳）

東京の日頃の勉強会で顔を合はせてゐる飯島隆史兄、内海勝彦兄、池松伸典兄の三人が登壇した講義は、それぞれの個性持ち味が発揮されて感銘深いものがあった。小柳左門氏の講義もまだまだ聞きたいものであったし、今村武人さんの短歌全体批評も人柄がにじみでてゐた。全体感想自由発表の学生諸君の素直な言葉もうれしかった。太子のご精神、歌の楽しさ、そのとっかかりを大切にしてもらひたいものだ。

合宿参加者は残念乍ら益々減少してゐる。結局、うちとけあふつき合ひがどれだけ展開できるかがポイントなのだらう。会員間も会員と学生の間も。今回は旧友森田仁士兄と同室で久し振りににゆっくり語れた。二泊三日といふ短い、慌ただしい日程であったが、よい合宿ができた。武澤陽介運営委員長のご苦労に謝意を表したい。

今村武人さんの短歌全体批評

相互批評の心構へをわかりやすく説きゆく話に耳傾けぬ

子を思ひ人を思ふときに歌を詠む道開けしと君は語りき

島津正數先輩を

様々の会の催しにひたむきにつくされし先輩病み給ひけり

合宿の日程表にみ思ひを寄せますお歌かなしかりけり

皆様のご努力に敬意を表します

（朝倉公共職業安定所　古川広治　50歳）

合宿導入講義の資料に本居宣長の「うひ山ぶみ」の一文〈…されば才のともしきや、學ぶことの晩きや、暇のなきやによりて、思ひくづをれて、止むことなかれ、とてもかくても、つとめだにすれば、出来るものと心得べし、すべて、思ひくづをるゝは、學問に大にきらふ事ぞかし〉が引かれてゐた。暇を見つけて、作り出して、はげみつとめることが必要であると改めて思ふ。

二泊三日の本合宿に短歌創作相互批評を入れた日程も事なく終へやうとしてゐる。運営委員長はじめ運営委員の皆様の一年のご努力に敬意を表します。

自らの学問深めるいとなみをくづほることなくつとめんと

事務局

運営の核になる人材育成が課題

（元 東急建設（株） 奥冨修一 71歳）

例年の事とは言へ、今年も又、事務局員に加へて運営委員、指揮班の方々の多大なるご協力の下事務局は最終日を迎へることができた。特に気がかりであった名簿作成、名札作成にはPCスキルある方にご尽力いただけた。ここ数年、形式を簡略化してきてをり会員諸氏のご理解も得て来てるやうに感じてゐます。

合宿運営に当たる運営本部と指揮班の連携プレーが細部にわたって良くできてゐたと感じた。従来の運営方式を踏襲しながら改革できるところは積極的に取り入れていただき、事務局の作業も軽減できた。来年以降運営の核になる人材を育成していくことが今後の大きな課題ではないかと思ひます。

友みなの力集めて合宿をつつがなく終へり有難きかな

閉会式。山口秀範常務理事は、「この合宿に参加して心に動いたこと、気付いたことを一つでも二つでも大事にしていただきたい。そして、学校や職場に戻って少しでも大きなもの確かなものにしていただきたい。」と述べた。

各大学に短歌会が出来始めてゐる新しい風が
日本全国に吹き渡るやう微力ながら努めたい

（元 日商岩井（株） 澤部壽孫 76歳）

合宿を終るに当り、武澤陽介運営委員長、髙橋俊太郎指揮班長、小柳志乃夫さん、及びスタッフの皆さんに深謝申し上げます。あっと言ふ間の二泊三日の合宿であった。

真正なる一人の日本人を見つけ得たのか自信はない。今年の合宿の終りは来年の合宿の始まりであると思ってつとめたいと思ふ。各大学に短歌会が出来始めてゐるのは心強い。この新しい風が日本全国に吹き渡るやう微力ながら努めたいと思ふ。國武忠彦さん、山本博資兄との合宿事前準備は例年になく楽しいものであった。「和歌導入講義」は「短歌創作導入講義」に戻すべきであらう。年令表示もいつの間にか満年令になってゐるがそれで良いのか。

合宿最終日

白雲のたなびく空に半月の浮び静けき朝清々し
学生の壇上に立ち万葉の歌にふれたる喜び語る
聖徳太子の御言葉にふれ胸つまる思ひを語る若き友らは

「国の目覚めと万葉集」の講義を
広く一般に聞いていただきたい

（元 川崎重工業（株） 山本博資 76歳）

運営委員（御意見番含め）、指揮班の皆さんには、合宿期間中は勿論、準備段階からのご努力、ご尽力に謝意を表します。参加者の事故もなく無事終了できたことを共に喜びたいと思ひます。事務局としても大きな支障もなくお手伝ひできました。

「国の目覚めと万葉集」の講義は合宿教室だけでなく、広く一般の人たちに聞いていただきたいと思ふものです。「国民文化講座」でのご検討をお願ひします。

高宮祭場参拝

みやしろの社のなかに鎮もれる祈りのにはに詣づかしこさ
参拝（あめみまい）の拍手（かしわで）の音ここちよく社（やしろ）のなかにひびきわたるも
「天孫（てんそん）を助け奉り」給ふ三柱の女神（かみ）に国民（くにたみ）ならへとぞ思ふ

合宿に導かれていることを大変有難く
嬉しく思ふ

（大成建設（株） 川井泰彦 65歳）

宗像大社に初めて詣づる機会を得、おかげ様で古より神々が我国をお譲り下さってゐることを実感することが出来ました。又、今回は写真班を務めましたが、班別研修で皆さんが真剣に語り合ふ姿に接し、私自身大いに反省したことがあります。それは日常、相手に自分の心を伝へようとしてゐるのか、相手の声を聴きその心を受けとめようとしてゐるのかといふことです。六十年余りにわたり営々と続けて来られたこ

の合宿に導かれてゐることを大変有難く又嬉しく思ひます。
六十年余り続けこられし合宿につながる縁（えにし）をありがたく思ふ

見学

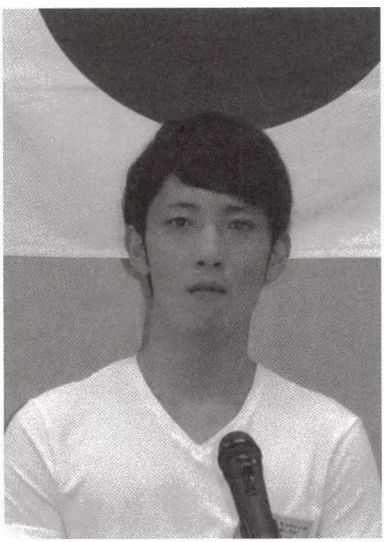
心を伝えていくこと

（飯塚市立頴田中学校　大津健志　38歳）

本合宿は人生の岐路に立ったときに道標になる言葉に出会えます。教師として教壇に立って10年以上になりますが、自分の将来について今迷いがでてきています。教育現場の矛盾や忙しさの中で自分が何を目指していたかを見失っていました。そんな折に合宿の中で「学問とは」と考えたり、「心情、感情の洗練」の大切さを実感したりする経験はとても貴重なものでした。「学問は学者の人格、志、生き方を離れては存在しない」や「聲は以って意を傳へ書は以って聲を傳ふ」という言葉はこれからの教師人生で大切にしたいと思ふ言葉です。自分のやっていることは心を伝えていくことだと腑に落ちました。国のために自分ができることを地道にやってゆくことで、少しでも力になれればと思います。

先人の生きた姿や人格を離せはしない学問の道
聲以って意を傳へ志育てることを目指し教へる

カメラ・レポート19



閉会式。武澤陽介合宿運営委員長（右）は「開会式で日本の心に触れる体験をしていただきたいと述べた。合宿が終れば、また日常の生活に戻ることになるが、この合宿で得られた体験や感動の光を大切にしていただきたい」と語った。大阪大学基礎工学部三年守田壮輝君（左）の閉会宣言で合宿教室は幕を閉ぢた。

合宿中に創作された〝短歌詠草〟

――しきしまのみち――

短歌創作について

この合宿教室では、例年、主催者を含めて参加者の全員が、短歌を作ることにしてをります。これは、この合宿教室の大きな研修課題の一つであり、今回も多くの短歌が創作されました。

短歌は、現代においては、人々の日常生活には馴染みの薄いものとなり、文学的趣味の一つとしてしか受け容れられなくなってをります。従って、この合宿教室に初めて参加する学生青年諸君にとって、短歌創作は大きな戸惑ひであり、かなりの負担でさへあるかに見受けられるのですが、合宿日程を追ふにつれ、自らの心の動きを言葉にすることのむづかしさ、まごころの籠った言葉の奥深い味はひを多少なりとも体験して行く中で、次第に、その意味が把握されて行った様に思はれます。

そもそも日本人は、千数百年の昔から、「万葉集」に見られるやうに、あらゆる身分・職業の人々が、学問知識の深浅、老若男女の相違を越えて、五七五七七の定型の中に、折々の自己の思ひを素直に歌ひ上げてきました。自己の内心を赤裸々に短歌の上に表現することは、同時に厳しい内省を伴ふものです。いはば短歌創作の過程で、厳しい心の鍛錬が行はれるのです。そこで私達の祖先は、短歌を詠むことを人生の修行の一つの手段と考へて「しきしまの道」とよんできました。日本人は、短歌を詠み交はすことによって、人間にとって最も大切な心の働き、情意を厳しく鍛へ合ってきたのです。先祖の歌を学ぶことは、私達一人一人の心の中に先祖の姿を蘇らせる作業であり、自分が紛れもなく先祖とのつながりをもった日本人であることの発見であり、また自覚なのではないでせうか。

現代の教育では、知識の集積や論理の整合に重きが置かれ、人間にとって最も根源的な心の問題がなほざりにされてゐます。本合宿では、かうした現代教育の束縛を自ら感知し、そこから一歩でも抜け出さうとする営みが、この短歌創作とその後の参加者同士の相互批評によって集中的になされてゆきます。心の奥底に眠ってゐるまごころを呼び覚まし、人のまごころに敏感に感じる、素朴にして豊かな人間性を取り戻さうとする試みが、ささやかながらも実現されてゆくこの貴重な経験は、参加者全員にとって、忘れがたい印象として心の奥深く刻み込まれるに違ひありません。

合宿二日目の午後、国民文化研究会会員の池松伸典氏（若築建設(株)）により短歌導入講義がなされ、短歌を作る上での基本的ルールが指導されました。その後夕刻までに各人が創作した第一回目の短歌が提出されました。慌ただしい日程の中で生み出された短歌ではありますが、作者の集中された内心の働きがはしばしに表現されてをり、作歌上の巧拙を越えて、強く惹かれるものが籠ってをります。提出された短歌は、同時に国民文化研究会会員による選歌・印刷のための清書作業を通じて、翌日には歌稿となって参加者全員に配布されました。この歌稿をもとに国民文化研究会会員の今村武人氏（熊本県立第二高等学校教諭）によって、短歌全体批評がなされました。作品の一語一語に籠められた作者の気持ちをできるだけ偲ばれ、不明なところはそのままに、明晰に歌を直されてゆく姿に、参加者は短歌批評のあり方を自然に感得したのでした。

その後、班ごとに班員全員による相互批評が行はれ、各自の短歌の表現をより正確に添削し合ふことを通じ互ひに友達の心に触れ合ふことが出来、合宿生活において、寝食を共にし、胸中を披瀝し合って来た友情の結び付きが、一段と確認されました。短歌創作を通して展開された、まことに稀な精神生活の体験は、参加者一人一人に、言ひ知れぬ喜びをもたらすこととなりました。

ここに収録された短歌の数々は、班員の心を集結して推敲・添削されたものです。その表現形式においては稚拙なところも見受けられますが、これらの短歌の中から瑞々しい貴重な魂の輝きをお読み取りいただければと、心から祈念する次第です。

短歌詠草（しきしまのみち）

合宿第一回目の創作作品（班別相互批評をして添削された作品です。尚、第二回目の作品は感想文の末尾に収録。）

男子学生第一班

（株）ハウインターナショナル　桑木康宏

ふきぬくるさやけき風をうけながら高宮に参りぬせみなく林に

筑波大学大学院　人文社会科学　一年　横川翔

造営中の第二宮第三宮を拝し奉りて神宮の古宮賜はり建て替ふる宮に惹かれて仰ぎ見奉る

辺津宮に神ましますと聞きつれど新たなる宮も仰ぐにすがし

皇學館大学　文　四年　江崎義訓

宗像大社神宝館にて

みてぐらと神に捧げし御宝を直に眺むることの嬉しさ

古の神祀る状偲びつつ千歳古りにし御鏡拝す

佐賀大学　文化教育　四年　藤近晃久

サークルの友らと離れ合宿の学びの庭に一人来にけり

学び合ふ友らと過ごすもあと一日自分を見つむる時にこそせめ

思ふこと思ふがままに歌に詠み前へと向ふ力を生まむ

福岡教育大学　教　三年　堤　正史

せみの音の二重に三重に響きけり語り合ひつつ歩む山路に

長崎大学　教　二年　戸川裕介

高宮祭場にて

姫神の祀らるる庭は静まりて木立にせみのさはやかに鳴く

福岡大学　経　二年　西田忠正

拝殿にて

古びたる社の庭に吹きわたる涼しき風は昔も吹きけむ

元　熊本市役所　折田豊生

辺津の宮にゐずまひ正しをろがめば社のにはにすず風わたる

み祖らが代々守り来しみ社の千歳の昔今し思はゆ

神々の宿れるごとく繁り合ふ木々の下道ゆくがゆかしさ

真之の凛々しきおもを偲ばする戦艦三笠の古びし羅針儀

もろともに今防人をつとめ合ふ我らを守らせ給へ神々

全日本学生文化会議　坂本匡史

班別研修

腕を組みうんうん唸りて一言の言葉に真向かふ学びの尊し

班員の言葉受けてなるほどと班長の声部屋に響けり

花を見て親を思ひし防人の優しき心に気づき驚く

小柳左門先生の古典講義

師の君の面輝きて萬葉の歌に命を吹き込まれけり

師の君のいと美しとのたまへば我も美しと思はれにけり

男子学生第二班

平山直樹税理士事務所　北村公一

拝殿に頭垂るれば一陣の風吹きゆきて祝詞

始まる
階を昇りて行けば森の中清しき風の吹きて
涼しき
海原はるか六十キロの沖ノ島神職独りで守
りますとふ
幾千歳昔のものとは思はれぬ黄金の指輪の
光輝く
皇學館大学　神道学専攻科　一年　名和長高

宗像大社の高宮祭場に参りて
上つ代に神祀りせし祭場に吹きくる風は神
宿るらむ
広島修道大学　法　四年　田中壯卓

日本海海戦の戦況を記録した社務日誌
を見て
海戦の激しき様の記されし神職の日誌に心
打たるる
大阪大学　基礎工　三年　守田壮輝

降りそそぐ夏の日差しも心地良し友と語ら
ひ参道行けば
京都産業大学　経営　三年　船岡龍一

高宮の丘より望む玄海の神宿る島に思ひを
馳する
長崎大学　環境科学　一年　中村祐哉

千年を超えて地中に耐へ残り金の指輪は光
り輝く
元　熊本県立大津高等学校校長　白濱　裕

高宮祭場に詣づ
木漏れ日のまだらにゆらぐ参道を友と語ら
ひ登りゆくなり
ひもろぎの祭りの庭は古の姿とどめて静ま
り居れり
参道ゆはるかに見ゆる玄海の真中に坐すか
神住む島は
大古より掟守りて伝へ来し神祭りの様畏か
りけり

男子学生第三班

祐誠高等学校教諭　小林国平

朝の集ひ・ラジオ体操の折
我もまた前に立たんと手を上げし三班男子
の心意気うれし
それぞれに1・2・3・4と声上ぐれば動
きもそろふラジオ体操

○

車窓より風に揺られし水田の波打つ緑のま
ばゆく見ゆる
國學院大學大学院　文学研究科　一年　大貫大樹

学兄二人と展示室を見て
何気なき雑話なれども友どちのくはしき話
に我驚きぬ
長崎大学　教　五年　柗本　仁

眠たげに広場に集ふ人々を柔らかに照らす
朝の太陽
万葉の防人歌はまごころを思ひのままに歌
ひしと感ず
早稲田大学　教　二年　嶋田裕一

高宮祭場に参りて
神様の御坐します祭場に来れば胸の緊ま
る心地す
神宝館を訪ねて日露戦争で
使はれし品を見て
日露戦に勝ちし契機は御声なりと知れば
畏れの心地しかせず
目の前にあるは日露戦を戦ひし羅針儀なる
とは信じ難きも
宮崎大学　環境ロボティクス　三年　石本篤史

宗像神社での散策にて
学友と共に歩きて語り合ひ歳は違へど心通
へる
横浜国立大学　理工　二年　渡辺幹成

高宮祭場への道にて
み林のかほりを浴みて思ひ出す友らと歩き

し山の小道を

福岡大学　経　一年　宮本　浩

高宮祭場へ参る折に

仕切りなく蝉の声にも囲まれて過ぎゆく時の惜しまるるかな

元 福岡県立直方高等学校教諭　小野吉宣

小柳左門兄の講義の折に

二万余の皇軍（すめらみいくさ）達は白村の江（はくすき）のあたりに生命ささぐる

東国の若き兵士は父母や妻を偲びて歌に誦みけり

内海勝彦兄の講義の折に

ひとときも眠れぬままに壇に立ち友は説きけり心を込めて

聖王の御言葉今に生き生きと甦へりけり君が語れば

伊佐ホームズ(株)　小柳雄平

散策にて合原俊光先生に会ふ（高校の先生）

散策の集合場所にぞおもむけば合原先生のお姿を見つ

体調をくづしたまひて合宿に来れぬとききをりし師のましますも

先生と声をかくれば雄平君とおどろき笑みますなつかしき師は

ますますにやさしさみちし師の君の笑顔を見れば涙こみあぐ

○

バスの窓ゆ身をのりだして師の君のみ手を握りて別れのべにき

雄平君に会へて嬉しかったとのたまひし合原先生のみ姿かしこし

我がバスに腕を大きく振り給ひ見送りくれます師をかへりみつ

女子第一班

元 富山県立富山工業高等学校教諭　岸本　弘

宗像大社参詣

境内の樹木は風にゆらぎゐて神代の道に入るここちす

三はしらの女神（ひめがみ）なりといにしへゆ海と陸（くが）とに社つらねて

合原俊光さんご夫妻(久留米市)

宗像神社まで出向かるる

思はざる逢ひとなりけり朝倉の宮路を越えて来ませり夫婦（めを）は

我ら乗るバスの姿をお二人は見えずなるまで見送りまさむ

野々村　悦子

宗像大社に参拝して

誓約（うけひ）にて産まれし三柱祀りたる貴き宮に今し我立つ

厳かな祝詞（のりと）響きて正殿に額づく我に涼風（すずかぜ）の吹く

蝉はなき長い石段登り切り高宮祭場神宿るなり

（一社）福岡中小企業経営者協会　福元晶子

生ひ茂る木立の中の階段を昇りし先に高宮現はる

三女神降り立ち賜ひしその場所は古の祭りを伝ふるといふ

長崎大　教　三年　桑原由夏

神宝館にて

完璧な形でなけれど残さるる神宝見ゆれば古偲ばゆ

平兼盛の歌を見し折

我が顔の思はずほころぶ恋歌に素直な心の尊さ感ず

長崎大　教　二年　岡　美希

風が吹き葉は揺るるともでんと立つ檜の木のごとく強くありたし

木漏れ日が差し込み照らす道に待つ母のもとへと駆け出す子あり

全身で風受け止める木のごとく広い心を持ちて生きたし
踏まれても蹴られてもただ一心に生きゆく芝の頼もしきかな

西南学院大　法　二年　江崎文重

宗像大社散策にて

夏空に木洩れ日涼し大社己の命のはかなさを知る
和らかな木洩れ日照らす参道は姫神降り立つ道にぞ見ゆる

中村学園大　流通科学　二年　新井絵梨菓

宗像の女神守れる玄海の恵みを受けて育ちし我ら
万葉の歌人も恋しき人想ひあふるる思ひ歌にしたため

太成殿本宮　高見澤　玉江

祈り継ぎ守り継がれる辺津宮へ参る術なし女人の我は
高宮の庭にゆらめくこもれびは古代と今をつなぐ心地す

女子第二班

（株）寺子屋モデル　西山八郎

宗像大社にて

森陰の小径を辿りゆく夏ををしむがに鳴くせみの声きく
ゆずり受けし神宮の古木で造りたる宮おごそかに森に立ちをり
社なき高宮近くをろがめば遠き昔のみ代しのばるゝ

（公財）郷学研修所　安岡正篤記念館　嶋田元子

来し方を語りますがに本殿の脇に枝張る神木の楢
神代より伝はる証ぞ沖津宮ゆ堀り出だされし三種の神器

日本生命　野々村　美紀子

高宮祭場にて

神代へと思ひ馳せつつ神籬（ひもろぎ）のみ前に立ちて祈り捧ぐる

長崎大　教　三年　代田瑞希

宗像大社にて

背を正し拝殿を吹く風受けて不思議に心さはやかになりぬ

長崎大　教　一年　小坂　萌

合宿で初めて会った友と

初めて過ごす夜
気のおけぬ夜のおしゃべり楽しくて気付けば時計は一時を回る

中村学園大　教　一年　下道夏芽

恋ひ慕ふ君の便りを待ちわびてメール確かめ夜は更くるかな
背がために安眠も寝ずて恋ひわたる欲しき言葉は未だ来ずかな

天本和馬

高宮祭場

宗像の神降りたまひし高宮の祭りの庭は神さびてあり

社会人第一班

熊本県立熊本高等学校教諭　久保田　真

高宮を囲む木立ちで薄暗き広き斎庭は静かなりけり

（株）ちゅピCOMふれあい　北川文雄

いにしへゆ国がら示す物語言ひ伝へ残る社（やしろ）に詣（まを）る
天孫（あめみま）を助け奉（まつ）れと宣（の）りましし神勅あざやかに書（ふみ）に残れり
いにしへゆ海と国とを守られし宗像大神今仰（あふ）ぎ見る
国がらの幾千年と続き来し国の歴史を守りていかむ

元　マツダ(株)　久々宮　章

合宿参加者とも宗像大社に詣づ
拝殿に一同登りて座したれば涼しき風の吹き渡り来ぬ
み友らと打つ柏手は音高く拝殿内に響き渡りぬ
皇室と国護る宮ぞ宗像の三女神祭るこの御社は
日の本の国の宝ぞ皇室の弥栄祈る神のみ前に

門司印刷（株）　江島和男

すみわたる高宮の地で永々と続く祭事に思ひをはせる

茨城新聞社　佐川友一

小柳左門先生の御講義
万葉歌の中に郷土茨城の防人の歌を聞きて嬉しも

学校法人中村学園　原野敦志

本殿に座して感じるおごそかな空気に心引き締まりけり

（一社）福岡中小企業経営者協会　西本　涼

万葉集学びて知りたる先人の言葉に心動かされけり

社会医療法人　原土井病院　小柳左門

宗像の社に詣でて
姫神の天降りたまひし高宮の斎庭の木々の姿たふとき
集ひたる友らとともに拝みけり高く茂れる木陰の庭を
神さぶる庭をめぐりて立つ木々の梢ゆらして夏の風ふく
さはやかに風はわたりて歩みゆく参り路の上蝉はしき鳴く
宗像の社の千木の空高く仰ぐみ空に白き雲ゆく

内海勝彦君の講義

世間虚仮唯物是真の御教へに生かしめられき友の命は
亡き友の思ひしのびて御教へを学びゆきます君ぞ尊き

社会人第二班

（株）オートバックス　小田村　初男

平成二九年八月国文研合宿にて

宗像大社に参りて
宗像の大社に鎮もれる三柱の神は国護りたまふ
古へゆ大神たちは外国と通ひし海道を護り来たまへり
大神の降りたまひし高宮に登り参れば神籬のあり
高宮は木々の巡りて静けくも風吹き渡りいと清々し

熊本市役所　嘱託　末次直人

八月十二日、宗像大社参詣
名にし負ふ宗像大社訪ひて古代の宝現に見たり

折尾愛真短期大学　松田　隆

宗像大社参拝
高宮の斎庭の石のその上に何見えなくも神おはすらむ

日章工業(株)　藤新成信

沖の島の地図を見て
海道の最中に立ちて日の本のみ国護りしみ姿尊し

高宮参拝の折に
木漏れ日に光る小径を班友と登り来たればそよかぜの吹く

合同会社瑞穂恒産　河崎　由紀夫

「学問と人生」を受講して
いにしへの書を読みたし学びたしおのが心を虚しくしつつ
短歌創作導入講義を受け

折々におのが心に感じたることをすなほに
詠むは楽しき
詠み人と心通ふはだいごみぞ我と彼との分
け目なくして

宗像大社

蝉鳴きて涼しき風のふきわたる杜をめぐ
りぬ同胞とともに
高宮に社はなけれどその奥に神籬祀りてか
しこくありぬ
国宝の刀と鏡まがたまを見てぞ古事記の世
界甦る

（一社）福岡中小企業経営者協会　西田　博
「学問と人生」の講義を受けて
（八月十一日午後）

なまけずに励みつづくる大切さに今更なが
ら気づかされけり

FOインターナショナル　西野裕史

宗像大社参拝

み社の庭に入ればおどろきぬ思ひのほかの
それの広さに

寺子屋石塾主宰　岩越豊雄

神前に座りて清め皆ともに大神祈ることの
のかしこさ
古きより皇室守りし宗像の扉に菊の紋章か
がやく
大神の降臨の地高宮の祭りの庭にすず風の
吹く
木の間よりもれくる光神まつる斎庭の石を
明るくてらす

国民文化研究会

昭和音楽大学名誉教授　國武忠彦

玄海の海辺に近く宗像の神の社に集ひて
参る
誓ひにてぬなとももゆらに成りませる
三姫神はここにいますか
吹きすつる気吹きの霧に成りませる三姫神
のしづまりいます
奇しくぞ妙なるものぞ楢の木の神のみし
わざ見るおもひする

国民文化研究会　理事長　今林賢郁

とことはの国の護りと三柱の女神鎮り給ふ
宗像大社
古の降臨の地といふ高宮の祭場に一陣の風
わたりゆく

（二回目の作品）

合宿を顧みて

み国護るいのち燃えよと若きらに語りゆき
たり湧きくる思ひを
おのがじし自から立つ意思固めつつみ国支
ふる柱となるべし
足らはざる力なれどもみ友らと心ひとつに
集ひ続けむ

元　拓殖大学　日本文化研究所　客員教授　山内健生

宗像大社へ向ふバスの車中にて

夏の日の陽ざしをあびて道添ひの稲田の若
穂の風にゆるるも
この先に雨風あまることなくて刈取りのと
きに至るを祈りぬ

宗像大社にて

天孫の契約に源づく宗像のお社をろがむ
合宿の友らと
三はしらの姫神さまの鎮もれる宗像大社を
拝みまつる
理事長の拝礼に合はせて我ら打つ拍手の音
の心地よきなり
訪ね来し我らに向ひて神主さんは汗ぬぐひ
つつ説明したまふ
いや古きみまつりのさまのしのばるる高宮
祭場の心に残りぬ

（株）寺子屋モデル　山口秀範

内海勝彦さんの講義

読み慣れし書の心を伝へむと徹夜のみ友
壇上に立つ
訥々と語り出だせど生来の君のまごころ言
葉に滲めり
若き日の一途な面差しそのままに年輪重ね
し人柄ともし
君の説く太子の大悲は若きらの心に火灯す
よすがとなれかし

（株）ＩＨＩエアロスペース　内海勝彦

高宮祭場にて

宗像の大神天降りますといふ高宮祭場拝
みまつる
み社もなき斎庭にはひもろぎの二本の木
寂しく立てり
古の祀りの姿そのままを今に伝ふる広
前かしこし

若築建設（株）　池松伸典

宗像大社高宮祭場に向ひて

御社の木かげの道に風たちて木の葉をゆす
る音の心地よし
祭場に近づくほどに神々のいますがごと
く思はれにけり
樹々の間ゆ遠目にしるく玄海の海原の上に
船すすむ見ゆ

車中にて

緑なす田の面の若葉の風うけて波立ちにけ
り夏の陽さしに
御社に向ふこの道三年前歩みし様と変は
らずありけり
なつかしき宗像の地に白鷺のたたずみてを
りかの日のままに

熊本県立第二高等学校教諭　今村武人

宗像大社を訪ねて

若人も鳥居の前で頭下げくぐりゆけるも
すがしかりけり
「相生の樫」は夫婦の円満の福徳やどると
神職のいふ
沖つ島ゆ出でし神器をながめつつ古へ人
の業ひ思ほゆ

旗艦「三笠」の遺品を見て

海戦の勝利は神のご加護とふ元帥深謝し羅
針儀を贈る
御神勅受けたまはりし三女神つとめ果して
天孫守る

指揮班

（株）ラック　高橋　俊太郎

宗像大社にて

高宮の林を風がふきぬけて夏の日差しをし
ばし忘るる

豊司会　新門司病院　森田仁士

年に一度ともに集ひて学びたる友と今年も
会へて嬉しく
力無き我をも友と呼びくれし友ありがたく
四十年経ちぬ

新日鉄住金ソリューションズ　鷲頭祥平

初の指揮班になりて

ひたむきに合宿に取り組む参加者の一助と
なれてうれしく思ふ

Ｈｕｂａｘ（株）　岡部智哉

高宮祭場

敷き詰めし砂利を踏む音に目をやれば蝉の
死骸の潰れたるを見る

運営本部

上野学園高等学校　武澤陽介

合宿地に皆を迎へて

真夏日の香椎に集ひし参加者の健やかなる
を切に願ふも

ＩＢＪＬ東芝リース（株）　小柳　志乃夫

池松伸典兄の短歌導入講義

今は亡き先生方の高き心仰ぎつつ友は歌の

道説く
若き友のはたまた若き母の思ひよみがへる
かな友の話に（佐野宜志君、野元恵理さん）
今の世に心を磨く学問の如何に貴きと友は
語れり
伝へたき思ひあふれてとどまらず訴ふ言葉
に力こもれる
東京に共に学べる友二人大き務めを果せし
今日は

元（株）アルバック　北濱道

小柳左門先生のご講義をお聞きして
「父母が頭掻き撫で」と詠み給ふみ祖の御
言葉胸に迫り来
自らの心洗はるる心地してみ祖の御言葉読
みあかぬかも

宗像大社拝殿にて正式参拝す

蝉しぐれ頻き鳴く中にをろがめば涼風吹
きて御簾ゆらぎけり

（二回目の作品）

山内健生先生の御講義をお聞きして

我が国の人には当たり前なれど外国人に
は驚きならむと
地震にて散乱したる品物を取らずに並べる
買物客は
他国にては略奪暴動不思議無き事にてある
にさはあらざりき
まがゆるに犯罪増ゆるはこれまでになかり
しなりと示し給ひぬ
先の地震の天皇の宣らしたる大御言葉
に我ら救はる
大御言葉読み上げゆけば胸迫りしばし言葉
をつまらせ給ひぬ
言葉つまりつまりましつつ大御言葉を読み
上げますに胸を衝かれき
我らより困る人ありそを先にと物を回せし
人らもありけり
黙々と己がありどを受け入れて生き給ひた
る人ら尊し
わたくしを抑へて生くるが当り前と思ふは
世界の奇跡ならずや
その事に気付かせ給ふ先生のお話事毎心揺
すりぬ
「日本人の無私」とでも呼ぶ事共を歴史の
中に訪ねゆきたし

島津正敷先輩のお便りを拝読して

友らとの楽しき語らひ心待ちにし給ひにけ
むお心偲ばゆ
至らざる我にも心を寄せ給ふお姿かしこく
思ひ出さるる
今はただ先輩のおん身の恙なく健やかにま
せと切に祈りぬ

朝倉公共職業安定所　古川広治

防人の歌

父母を思ふこころの時をへてよみがへり来
ぬ歌読みゆけば

事務局

元 東急建設（株）　奥冨修一

飯島隆史氏の合宿導入講義を聴きて

怠らずつとめはげむが何よりも大切なりと
友は語りぬ
若き日ゆ学び来し道たどりつつ師のみ言葉
を語る友はも

宗像大社にて

いにしへの神まつるさまの偲ばれてしばし
をろがむ高宮の社

元 日商岩井（株）　澤部壽孫

八月十日

一昨年と去年逝きましし大人二人偲びつつ
飛ぶ筑紫目指して

（小柳陽太郎先生、寶邉正久両先生のことを）

真夏日の香椎の浜に降り立てば潮風肌身に

心地よく吹く
四人して木々の間の細道を語らひ行けば蝉のしき鳴く

○

友らとの笑ひの絶えぬ仕事場に合宿資料をつくるは楽し

十一日、飯島隆史さんの御講義
「小林秀雄に学ぶ」を聞きて

亡き大人のいと読み難き文章を心を込めて説きゆく友は
我が友のこのひと年のご苦労を偲びつつ友らと耳傾ける

小柳左門さんの「国の目覚めと万葉集」を聞きて

スライドを見せつつ友の語ります万葉の歌々胸に沁み入る
清らにて明るき心溢れたる万葉の歌は聞き飽かぬかも
天翔ける御父上の御魂も嬉しげにみそなはすらむ友の姿を

十二日、内海勝彦さんの御講義
「聖徳太子の言葉に触れて」

幾十年太子の御書を輪読み来たる友の言葉に力ありけり
亡き友の御歌を聞けば在りし日の友面影に顕ち懐かしきかな（山根清君のことを）

宗像大社参拝

真夏日に緑輝く山並みの続く國原車窓に見ゆる
神主の祝詞の声の響きたる堂内渡る爽やかな風
古ゆみ国守りしみ社に若き友らと詣づる今日は

元 川崎重工業(株) 山本博資 理事長挨拶を聞きて

国も人も自立の意志を示せてふ心構へを説きたまひけり
縁得て集ひきたりしひとたちと手をとり合ひて学びたまへと
自らの言葉で思ひを語り合ひ心ひらくはかなめなりてふ

飯島隆史氏の講義を聞きて

宣長の『うひ山ぶみ』にふれながら学ぶたのしみ語り給へり

島津正數氏への返し

思はざる病となりて合宿に参加かなはず友ぞ口惜し
いまはただ心ひとつにリハビリにつとめ給へとせつに祈るも

国民文化研究会 事務局長 磯貝保博

宗像大社高宮祭場にて

石段を登りつめれば高宮を巡る森かげ厳かに見ゆ
神やどる姿をとどむ森かげと敷石見つつ昔しぬびぬ
しめ縄の揺れるを見つつ三柱の神の天降りし往時を思ふ
神々の心に触るる思ひ得て詣りしこの日ありがたきかな

大成建設(株) 川井泰彦

福岡に生れ育つもこの歳になりて初めて御社に詣づ
神々は国護らむと海を往く軍人らを守り給へり

合宿地に寄せられし歌

東京都 島津正數

合宿の日（八月十日）

合宿の朝を迎へて思ふかな学び語らふ友ら羨しき
ふるさとの香椎が浜の合宿に集ふ友らに会ひたきものを

合宿の営みつとむる先輩の姿を遠く偲びまつりぬ　（澤部壽孫、山本博資両先輩に）

合宿に集へる若き友がきのよき友得むを遠くいのりぬ

○

合宿の日程表を壁に貼り叶はぬ講義を遠く偲べり

あとがき

初冬の候、皆様にはその後如何お過しでせうか。

福岡市「さわやかトレーニングセンター福岡」で共に学び、語り合った「合宿教室」から早四ヶ月が過ぎました。この度やうやくこの「感想文集」を皆様のお手元にお届け出来る運びとなりました。

この「感想文集」は、「合宿教室」の最後に走り書きしていただいた感想文と短歌を編集したものです。

編集作業は、まづ、それぞれの班の班長に、感想文と第二回目の創作短歌を添削・編集していただくことから始めました。

皆さんお一人お一人のお心こもる文章・短歌を丹念に読み返し、文字を正確に辿る編集作業は、神経を使ひ、時間も掛かるものではありますが、それは同時に、お一人お一人のみづみづしい心の動きに触れることのできる、心楽しくよろこばしいひと時でありました。

本感想文集編集方針は以下の通りです。

一　「感想文」について

執筆者のお心のうちが最もよく表れてゐる箇所を摘要し、表題も付けました。逆に文意の不明瞭なところは、執筆者のお気持ちを辿りながら、原文のニュアンスが損はれないやう加筆しました。なほ、「かなづかひ」については、原文を尊重し、漢字および文法上の誤りについては訂正してをります。

二　「短歌」について

「合宿教室」では、二回にわたって短歌を作りましたが、第一回目の班別相互批評にて添削されたものは「短歌詠草」に収めました。感想文執筆の折に作っていただいた第二回目の短歌は、感想文の末尾に入れました。

どちらも文字表記は、全員歴史的かなづかひに統一し、文法上の誤り等は感想文と同様に訂正いたしました。

この「感想文集」作成のためには、班長の他にも多くの方のご協力を頂きました。お忙しい生業の傍らご協力いただきました蔭山武志、穴井宏明、髙木雅史、武田有朋、濱崎史嘉、の各氏に心より御礼申し上げます。

カメラ・レポートの写真は、川井泰彦さん（大成建設(株)）にお世話になりました。

多くの方のご協力によって出来上がった「感想文集」を、ご精読下さいますやうお願ひ申し上げます。

本文集を読み進むにつれて、「合宿教室」の様々な感動が甦ってくる事と存じます。

お読みの後は、班長、班付、班友、更には他班の方へも、一筆お便りを差し上げていただき、今後も互ひに励まし合ひ学んでゆくことができれば幸ひです。

（北濱　道　記）

第六十二回「合宿教室」（福岡）感想文集

非売品

平成二十九年十二月二十五日発行

編集兼発行者

公益社団法人　国民文化研究会

理事長　今林賢郁

編集　北濱道・佐川友一

東京都渋谷区東一―十三―一―四〇二号

〒一五〇―〇〇一一

電話　〇三―五四六八―六二三〇

FAX　〇三―五四六八―一四七〇